
東方探真記

ホシカゲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方探真記

【Nコード】

N9675Q

【作者名】

ホシカゲ

【あらすじ】

幻想郷、魔法の森。そこに一人の青年が迷い込んだ。

何とか元の世界に戻ろうするも、どうやらそう簡単にはいかないようで……

典型的な幻想入り妄想ものです。

独自設定、二次設定がそこそこの割合で混ざると思われますのでご注意ください。

#1 始まりなんてだいたいこんなもん（前書き）

ノートPC購入記念に書き始めてみました。

なにぶん若輩者ですので、何か至らぬ点があれば容赦無く指摘していただければ有難いです。

#1 始まりなんてだいたいこんなもん

はくれないじんじゃ
博麗神社。

げんそうきょう
幻想郷の東の端に位置するこの場所で、はくれないれいむ博麗霊夢はいつも通り縁側でお茶を飲んでいた。

博麗の巫女として、妖怪退治と異変の解決を生業とする彼女ではあるが、平和なときはこうして茶を啜りながら煎餅を齧るのが楽しみだったりする。

最も、実を言うと境内の途中で放り出しているのが現状であったりするのだが。

日頃参拝客の少なさ（というよりほぼ皆無）を嘆いている彼女ではあるが、このいい加減な性格が原因の一つであるのは想像に難くないことであった。

やかましい客も本日は来る気配が無い。このまま昼寝でもするか、と、欠伸を一つした時だった。

「――――っ!？」

突然感じた感覚に飛び起きる。

何代も続く博麗の巫女であるが、今代である霊夢の強さの所以の一つがその『勘』の強さである。

異変が起こると、何となく、で行先を決めて飛び、出会った妖怪幽霊人間その他諸々を纏めてぶち倒し、最終的に元凶へと辿り着く。

あまりにも無茶苦茶ではあるが、彼女をよく知る者ならば、誰しもがその『勘』の恐ろしさを知っていた。

「結界が揺らいだ……？」

彼女が見つめる先には何もない。

しかし、彼女はそれを感じ取ったらしい。

一瞬ではあり、もう既に感じることはない——が、それは『何か』が始まることを予感させた。

「また面倒なことにならないでしょうね……」

溜息を吐きながら一人愚痴る。

そのまま何かを考えるように、しばらく彼方を見つめていたが――

――とりあえず、寝るか。

そう結論付けた彼女は、再び横になった。



右を見る。

左を見る。

最後に上を見上げてから、重い重い溜息を吐いた。

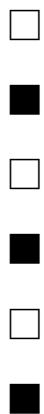
「いや、何処だよここ……」

生い茂る木。

湿った土。

狭い空。

深い森の中、絶賛遭難中であつた。



目が覚めたら全く知らない所に居た。

そんなファンタジックな事態が実際に起こりうるかは別にして、もしそうなったらどんな反応をするのかは千差万別であろうが、少なくとも現在そんな状況に直面中である青年、折宮遊真は途方^{おりみや あすま}に暮れるのみだった。

彼の意識が覚醒したとき、最初に感じた感覚は使い慣れた布団の暖かさではなく、硬い地面と土の匂いだった。

暫しの間呆然とし、ようやく我に戻ってみても何が何だかわからない。

とりあえず当てもなく歩き出してみたものの、舗装などされていない筈のない道を進むのは現代人の遊真にとって苦痛以外の何でもない上に、いくら進んでも周囲の景色が変わることはない。

それでも諦め悪く20分ほど歩き続けた末に、疲労もあり、この

ままではまずいと立ち止まったのが先ほどの場面である。

一度冷静になってみるべきだ。

適当な木に寄りかかって休憩しながら、もう一度現状の整理を試みる。

とにかく、何故こんな状態になっているのか。

それを考える上で重要なのは、『前回意識を失ったのはいつか』である。

『目が覚めた』という現象には、『眠りに就いた』という前提が必要である。

普通に布団で眠ったとか、うっかりうたた寝してしまったとか。

あるいは、何らかの原因で気絶してしまった可能性もある。

深呼吸を一つ。

落ち着いて記憶を遡り、もう一度辿りなおす。

朝、いつも通り布団で目が覚め、家族と朝食を取り、大学へ向かい、講義を受け、と、そこまで行って記憶が止まる。

よくよく考えてみれば、今の自分は私服姿である。

特に凝ったわけではないが、自分なりの趣味と好みで構成されたカジュアルなファッション。

恐らく外出中であつたというのが普通の結論だろう。

つまり、大学、もしくはその帰り道で何かがあつた――――

「（―――っ!? いや、ちょっと待て）」

突然、何とも言い難い違和感に襲われる。
不安定な足場に立っているような、何かがおぼろげになっている
ような。

曖昧ではあるが、何かが決定的なまでにおかしく感じた。

深呼吸を一つ。二つ。三つ。

落ち着け、何だ、いったい何が――――

「……………ああ、そうか」

自分でも驚くほど、あっさりその答えは出た。

だが、『これ』は何を意味するのだろうか。

家族と朝食を取った。大学に行った。それは間違いない。
しかし、だ。

『中身』。

つまり、両親の顔だとか、何処の大学へ行ったとか、そもそも自
分の家族構成だとか。

まるで無理やり削り取られたかのように。
まるで何かに食い荒らされたかのように。

肝心な部分の記憶が、遊真には完全に欠落していたのだった。

「どういふことだよ、くそっ……」

いよいよもって訳がわからない。

記憶喪失？

こんな不格好で、酷く限定的で、さらに致命的な。

そんな記憶喪失がありえるのだろうか。

折宮遊真。

19歳。

男性。

とくに際立った長所も短所も無い、平均的で一般的な大学生――
――の、はず。

こうまでなると、今思い出せる記憶ですらも怪しく感じてくる。

自分が急に薄っぺらくなったような錯覚。

それがまた気持ちが悪いのもので、思わず誰に向けたものでもない舌打ちをした。

気付けば、木々の間に僅かに見える空が橙色に色付いている。

このまま夜になってしまふのだろうか。

そうになったら自分はどうなる？

右も左もわからないこんな場所で、食べ物も無い、行動の指針もない。

このままでは、行き着く先はたっ死た一つではないか――

どんどん思考がネガティブの海に沈んでいった時だった。

———がさり。

「っ!？」

突如聞こえた物音に現実に戻される。
飛び跳ねるように身を起こし、音がした方角を注視する。

———がさり。

風が吹いたわけではない。
しかし、明らかに茂みが揺れた。
しかも、先ほどよりも近い場所で。

人か？ という思いが反射的に脳裏を過ぎる、が、すぐにその考えを捨て去った。

人が歩いた形跡もない森の中。まさに未踏の地である。その可能性は薄い。

ならば、人以外の『何か』。

油断していた、と、遊真は自分を叱咤した。

深い森の中。野生動物の一匹や二匹と遭遇しても何もおかしくはない。

それが野犬や熊だった場合、確実に自分の身に危険が及ぶのだ。
十分想定できる事態だったし、想定しておくべき事態だった。

「（すぐに逃げるべき……いや、背を向けるのはまずいか？ どうする————）」

結論から言えば、この迷いは致命的だった。

遊真が対処を決めるよりも早く、茂みの中から『それ』は姿を現した。

「————は？」

『それ』の姿を見た瞬間、遊真の体は凍り付いてしまった。
明らかに危険な行為であるとわかっていても、凍り付かざるを得なかった。

『それ』が一体何なのか、遊真の脳が理解することを拒んだのだ。

一般的な大型犬よりも一回り大きな体躯。

太い四つの足には鋭い爪。

濁った瞳には遊真の姿が浮かび上がっている。

そして何よりも。

————。
————。
————。

形容しがたい唸り声が『三つ』。
獲物を前にした『三つ』の口からはそれぞれ鋭利な牙が顔を覗かし。

『三つ』の頭は『一つ』の胴体へと繋がっている。

犬ではあるが、犬ではない。

地獄の番犬と呼ばれる化け物、『ケルベロス』を彷彿とさせる姿。
今までは幻想であつた筈の『それ』は、今、現実として目の前に存在していた。

動かない両者。

一方は間合いを測るため。もう一方は驚愕と恐怖から。
永遠とも一瞬ともとれないその時間は、『それ』の涎が地面に落ちた音で終わりを告げた。

「————っ!!」

体を反転させ、走り出す。

それ以外の行動はできなかった。

ただの野犬なら、あるいは撃退し得ることも可能だったかもしれない。

しかし、そんな考えは瞬時に打ち碎かれた。

そんなことをするべきではない、出来ない。本能が全力で警笛を鳴らしている。

「何なんだよ……何なんだよっ！ 畜生っ！」

振り向く余裕はないが、追いかけて来ているのが気配で分かる。追いつかれた時の光景は想像したくない。とにかく走る、走る。

「っ！ おいつ、誰かっ！」

必死に声を上げる。

『あれ』を犬と言っているのかわからないが、恐らく自分よりも走るのは速いし、スタミナもあるだろう。

右へ、左へ、何とか撒こうと方向を変えるが、どうやら効果がないうだ。

嗅覚か何かで付けられているのかもしれない。

加えて、地面は荒れていてデコボコである。体力の消費も激しい。追いつかれるのは時間の問題だった。

「誰かっ！ いないのかよっ、おいつ！」

死にたくなかった。

人生諦めが肝心だとも言うし、別にその考えを否定するわけでもない。

ただ、こんな訳のわからない状況で。

訳のわからないまま死んでしまうのだけは納得がいかなかった。

せめてここが何処なのか。

どうして自分が此処にいるのか。

それだけは、何としても突き止めたかった。

「おいっ、誰「何だー？」——うおおおおお！？」

しかしまあ、とりあえず声を上げたはいいものの。

まさかこうもあっさりと人と会うとは思わなかった訳で。

突如かけられた声と、ひょっこりと目の前に現れた人影に。

盛大にヘッドスライディングを仕掛けた彼を誰が責められるだろう。

「って、わああああ！？」

「だあああああ！？」

決死のダイブは人影に見事命中。二人はごろごろと地面に転がった。

「~~~~っ、何が……」

「あたた、何なんだぜ……」

痛打した額を押さえながら唸っていた遊真だったが、頭上からかけられた声にはっとし、顔を上げる。

そこにいたのは、一人の少女だった。

上下共に黒を基調とした服装で、ロングスカートに真っ白いエプロンを付けている。

日本ではなかなかお目にかかれなような、ウェーブのかかった美しいロングの金髪がそんな服装に映えて見えた。

くりくりとした瞳も髪と同じ金色で、可愛い顔立ちはまだ幼さを残している。

少女は、衝突の際落としたらしい帽子を拾いながら、遊真に話しかける。

「ずいぶん慌ててたみたいだが、何かあったのか？」

可愛い見えた目とは裏腹に、まるで男の子のような話し方である。

「……っ！ そうだ、あいつは……」

少女の言葉に自分が置かれていた状況を思い出し、飛び起きる。その瞬間、少女の後ろの草むらが揺れるのが見えた。

「？ 何が「危ねえっ！」おおっ！？」

咄嗟に少女を突き飛ばしたのと、『それ』が飛び出してくるのはほぼ同時だった。

その勢いのままで遊真は『それ』に体当たりする。

「っ！ くうっ！」

予想以上に重い衝撃。

遊真の全体重を込めた一撃だったが、『それ』は空中で身を翻し、あっさりと着地してしまう。

再び、睨み合い。

またも遊真を激しい恐怖が襲うが、次に彼がとった行動は以前の

ものとは違った。

「おいっ、逃げろ！」

背後にいるであろう少女にそう叫び、正面のそれを見据える。

先ほどまでは何としても生き延びてやろと思っていたが、この状況では遊真は迷わず囹になるという選択肢を選んだ。

たしかに死にたくはない。

しかし、後ろにいるのは自分より年若いであろう少女だ。

過去の自分がどんな生き方をしたかはおぼろげだが、少なくとも今の自分は、それを見捨てて逃げるようなことをしたくなかった。

「いいからっ、早く逃げろっ！」

後ろの少女が動いた気配はない。

恐怖で動けないのだろうか。過去の自分を回想しながら遊真はそう推測する。

勝算はないが、そう易々と死ぬつもりもない。

何とか隙を作って、この場を切り抜けなければ――

『それ』が動いた。

こちらへ走り出し、距離を詰め、飛び掛かる。

「おおおおっ！」

自分を奮い立てるために声を出す。

身構え、飛び掛かってくる『それ』を、現状を打破するために一

歩踏み出す。

その時だった。

———っ！

閃光。視界が白に染まる。

思わず目を閉じ、体が強張った。

「……………？」

何時まで経っても衝撃がやってこない。

不思議に思っただけで恐る恐る目を開けると、そこに映ったのは、『それが地面に倒れ、ぴくぴくと痙攣する姿だった。

まるで『それが引きずられたかのように、地面には抉れた跡がついている。

一体、何が。

「…………ふう、危機一髪、って奴だな」

混乱する遊真を現実に戻したのは、つい先ほど聞いたばかりの声だった。

———まさか。

ゆっくりと、振り返る。

そこに立っているのは、自分が守ろうとした少女だった。

「そうか、自己紹介がまだだったな」

まるで悪戯が成功した子供のようになり、無邪気に笑いながら少女は話す。

いつの間にか、拾った帽子をかぶり直していた。

黒を基調とした服装。

長く眩しい金髪。

それに、大きな黒い先の尖った帽子。

おまけに、どこから取り出したのだろうか、竹箒を肩に担いでいる。

そんな格好をしている人物を、遊真は知っていた。

それは御伽話の中の存在で、その力は誰もが一度は夢見たことがあるだろう。

その姿は、まるで――――

「霧雨魔理沙^{きりさめ まりさ}、普通の魔法使いだ、よろしくなっ」

#2 そこはかたなくファンタジー？

「……魔法、使い？」

魔法使い。

少女——霧雨魔理沙の言った言葉を頭の中で繰り返してみる。
——そうかあ、魔法使い……ええー？

黒い服。

とんがり帽子。

竹箒。

なるほど、そう言われてみれば。

彼女の格好は正に御伽話に登場するステレオタイプの魔法使いの姿と言えなくもない。

魔法使い、などというのであれば、それは勿論『魔法』を使えるのであろう。

先ほどの『それ』が飛びかかってきた瞬間の閃光を思い出す。

つまりあれが彼女の放った魔法で、それで見事『それ』の撃退に成功した、と。

そう考えれば合点はいく。そうではあるが……ええー？

「おいおい、助けてやったんだぜ？ もっと嬉しそうにしたらどうだ？」

「いや、正直急展開すぎて頭が……」

まあ確かに、よく考えてみれば。

目が覚めたら知らない所にいたとか。

記憶がすつかすかになっているとか。

得体の知れない化け物に襲われるとか。

とにかく今までの常識では理解の出来ないことの連続で。

今さら魔法の一つや二つ出てきたところでおかしくないのかもしれない。

そう割り切ってしまうればいいのかもしれないが、そうはいかないのが固定概念の恐ろしいところである。

そもそも、魔法使いに『普通の』という言葉がつく時点でおかしい。

「あれは……その、君がやったんだよな？」

遊真はおっかなびっくりといった様子で、気絶しているらしい『それ』を指差しながらそう尋ねる。

「おう、勿論だぜっ」

元気よく返事をしながら、少女はぴん、と指を一本立ててみせる。遊真がそれに視線を向けるのを確認すると、ぐっと力を込めるような仕草をする。

次の瞬間、遊真の目はそこに釘付けになった。

□ □ □

「う……おお……」

ひとりでに口から声が漏れた。

魔理沙の指の上には、拳ほどの大きさの光球がふよふよ浮いていた。

きいいいん、と、僅かに高い音を発しながら。
小さな、しかしどこか力強い光。

自然現象や化学反応では説明のつかない、まさにそれは『魔法』だった。

「すっげえ……」

自分の体の中から、興奮にも似た熱が込み上げてくるのを、遊真は感じた。

記憶こそはっきりしないが、彼も幼い頃は、物語のヒーローや、かっこいい登場人物の使う不思議な力に憧れていたはずだった。

いや、今でもそんな思いは捨てきれていなかったのかもしれない。

だからこそ、自分は目の前に現れた光景に、こんなにも感動しているのだ。

遊真はそう思った。

そんな様子の遊真を見た魔理沙は、満足そうに一つ頷くと、ぱつと手を開く。

それだけの動作で、光はあっという間に霧散し、何事も無かったかのように元の景色が戻ってくる。

しかし、遊真の目と脳には、いつまでもさっきの光景が焼き付いているようだった。

「それにしても、変わった格好だし、ひょっとしてあんた外来人か？」

「……？ ガイライジン？」

その問いが自分へ向けられたものだということに気付くのに、遊真は少し時間がかかった。

魔女の格好をしている奴に服装のこととやかく言われるのはどうなんだろう、と少し思ったが、それよりも聞き慣れない言葉があったことに意識を集中する。

ガイライジン。どんな字を書くのだろうか。

「あー、いいぜ。その反応でだいたいわかる」

手を軽く振って遊真の思考を遮った魔理沙は、空へと視線を向ける。

差し込んでくる光は、既に薄闇色になっていた。

「まあ、とにかく私の家まで来いよ。夜道は危険だぜ？」
「……っと、ちょっと待ってくれ！」

歩き出した魔理沙の背を反射的に追おうとした遊真だったが、寸でのところで呼び止める。

きょとんとした様子で振り返った魔理沙に向けて、咳払いを一つ。

「あー……助けてくれて、ありがとう」

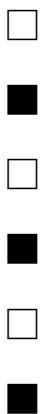
その言葉を聞いた魔理沙は、珍しいものでも見たかのように目をぱちぱちと瞬かせていた。

その反応を見て、遊真はなおさら恥ずかしくなった。

「それから……折宮、遊真だ。よろしく」

「おう、よろしくだぜっ！」

そう言って笑う魔理沙の姿はまるで太陽のようで。
遊真にとっては、正に一筋の光明だったのかもしれない。



「ついたついた、ここだ」

魔理沙の家は、遊真が想像していたよりもすぐ近くにあった。

「こっちの方に逃げてきたのは、本当に運がよかったのかもな……」
「まあ、この森に住んでるのは私だけって訳じゃないからな。ひよつとしたらそっちに助けられてたかもしれないぜ」

そもそもこんな事態に巻き込まれている時点で、幸運だとはとても言えないのかもしれないが。

「他にも居るって、そいつも魔法使いなのか？」

「ああ、ここは魔法の森だからな」

魔法の森。それがこの場所の名前らしい。

そんなけつたいな名前の森があつてたまるかと言いたいところだが、既に物証はいくつも見た気もする。

「立ち話もなんだし、とりあえず入れよ」

魔理沙の家は外観から見てもしつかりとした大きさだった。

しかも、来る途中に聞いた話だが、なんとここに一人で住んでいるらしい。

両親はどうしているんだろうと思わなくもなかったが、何かの地雷を踏み抜く可能性を恐れて、遊真はそのことは訊かなかった。

入口の扉を開けて入っていった魔理沙に続き、遊真も中を覗き込む――が。

「うげえ……」

失礼だということを承知で、遊真は呻き声を出した。

汚い。

というより、まるで台風が来た後の如く荒れ放題なのである。

とにかく散乱している物の中で、一番目立つのが本。

開きっぱなしのものや山のように高く積まれたものがあちこちに。

他にも、葉ビンのようなものや（中身が入っているものもちらはら）。

なぜかともんでもない配色のキノコとか（なんとなく食べると身長が二倍になりそうな気がした）。

「遊真ー、そこらへんは崩さないように気をつけろよー？」

そのくせ、本人は何でもないようにさっさと奥へ入って行ってしまった。

「もう、一生分驚いたかもな……」

深く考えたら負けだ。

そう思えてきたあたり、案外この環境にも順応できるような気がした。

ともかくして、魔理沙家進撃大作戦が開始したのだった。

□ ■ □ ■ □ ■

「何だ、遅かったな」

「……二、三回くらい死にかけた気がするんだけど」

ほどなくして、無事？奥へと二人は辿りついた。

ここまで来ると流石に物は少なくなってきた……と思いきや、特別片づいている訳ではなく、部屋の隅に無理やり押し込んでいたようだった。

中には怪しげな実験器具のようなものもちろほら見えたが、できる限り無視するように遊真は努めた。

「じゃあ、まあ座れよ」

部屋の明かりを点けてから、古い木のテーブルの傍に配置されていた椅子に魔理沙が座る。

それに倣うようにして、遊真も反対側の椅子に座った。

「さてと、それじゃあ」

何から聞きたい？

そう話す魔理沙の表情は、やはり悪戯っぽく笑っていた。



幻想郷。

そこでは、人間の他に、妖怪、幽霊、妖精、神様その他諸々が存在している。

時には妖が人^{あやか}を喰らい。

時には人が妖を退治し。

そのくせ時には人妖入り乱れて宴会で騒いだりもする。

それは、全てを受け入れる世界。
そう、残酷なほどに。

普段は『結界』により『外の世界』とは隔絶されている。
しかし、『何らかの原因』で『外の世界』から人や物が入り込んでくることがあり、その現象を『幻想入り』。『幻想入り』した『外の世界』に人間のことを『外来人』と呼ぶ。

□ ■ □ ■ □ ■

「幻想郷、ねえ……」

魔理沙の説明を聞いた遊真は、もう一度その言葉を噛み締める。
幻想郷。正にそれは遊真の知る『ファンタジー』の世界だ。

「ひょっとして、人が空を飛んだりもする？」

「当然だぜ。空を飛ばない魔法使いなんて魔法使いじゃない」

「箒でか」

「箒でだぜ」

まあ、それはともかくとして。

「でも、『何らかの原因』って何だ？」

「そこなんだよなあ」

遊真の問いを聞いた魔理沙は、困ったように頭を掻く。

「なあ遊真、何ていうか……亀裂、というより、スキマ、みたいなものを見た覚えはないか？」

「はあ、スキマ？」

唐突な魔理沙の問いに、遊真は記憶を探る。

しかし、もともとおぼろげな記憶。

しかも、探すものですらひどく抽象的である。

何か該当するものがひっかかるはずもなかった。

「いや、特に覚えはないけど」

「じゃあ、金髪の、髪の長い……あー、胡散臭い女を見なかったか？」

いや、胡散臭いって。

「いや、そもそも金髪の知り合いなんて霧雨以外に……んー？」

いたような、いなかったような。

「そうか、一度見たら忘れられないような奴なんだが……」

「というか、実を言うとだな」

そういえば、記憶のことをまだ伝えていなかったのである。

「記憶が、はっきりしないんだよ。生まれてから、この幻想郷に来るまでの」

「はあ、何だって？」

この発言には魔理沙も驚いたようで、目を見開いた。

「やっぱりおかしいのか、こういうことは」

「少なくとも私は聞いたことがないな……」

お手上げ、といった様子で魔理沙は万歳をする。

結局、遊真がここに来た理由はわからないようだった。

「まあ、わからないものは仕方がない。それよりもだ」

魔理沙が居住まいを正し、真剣な顔をする。

釣られて遊真も姿勢を直した。

「これからどうするつもりだ？ 帰りたいってなら、当てはあるぜ」

「本当か!？」

思わず身を乗り出した。

おぼろげではあるが、自分も一人の普通の人間である以上、家族や友人がいたことは間違いない。

ならば、急にいなくなった自分を心配している者がいるのも道理だろう。

それに、過去の記憶を探すならば、それが『外の世界』の記憶である以上、『外の世界』にいた方が都合がいいのは明らかである。

『幻想入り』の理由は気になるが、優先すべきものは他にある。迷う必要はない、はずだ。

「……帰れるのなら、俺は、帰りたい」

「そうか、おーけー、私に任せておけ」

そう言うのと、魔理沙は元の笑みを浮かべ、立ち上がった。

「とりあえず、今日はもう泊まっていけ。今から飯にするからさ」

「……すまん、いろんな事を世話になってばかりだ」

建前などではなく、本当に申し訳なく思った。

遊真が『元の世界』に帰るのを渋る理由があるとすれば、それは恩人である魔理沙に何の礼も返せていないことだ。

「気にするな、私は何時だって自分のために行動しているぜ」

それでも魔理沙はそう言い切った。

何でもないように。それが当たり前であるかのように。

「……自分のためって？」

首を傾げる遊真に向かって言ってみせる。

「だって、こうした方が面白そうだろ？」

そう言って笑う魔理沙の姿が、遊真にはただただ頼もしかった。

#2 そこはかとなるファンタジー？（後書き）

魔理沙かわいいよ魔理沙

嫁補正？一体何のことやら

#3 時には頭の切り替えも大事

霧雨魔理沙がその日外出していたのは偶然だった。

日課である魔法の研究が煮詰まってしまい、息抜きでもするかと、キノコの蒐集も兼ねて日が暮れるまで散歩に繰り出したところだったのである。

光や熱を操る派手な魔法を得意とする彼女だが、その研究は驚くほど地味なものだ。

魔法の森で採取してきたキノコを煮込んでスープにし、その場で適当なものを混ぜ込んでみる。

それを乾燥させて固形にした物をさらにフィーリングで熱してみたり、冷やしたり、衝撃を与えたりしたとき、極稀に魔法のようなものが発動することがあるのだという。

結果はすべてお手製の魔導書に記録し、成功したものを魔法の燃料として使うのだという。

この手間のかかる作業こそが、彼女を魔法使いたらしめる所以であり、彼女が努力家と呼ばれる理由でもある。

だからこそ、魔理沙は自分の『魔法』に誇りを持っていると言ってもいい。

ともかくして、そんな理由で彼女は一度研究を始めると何日も家を出ないことはよくあることで。

妖怪に追いかけられている遊真が彼女に見つけられたのは幸運と言う他無いだろう。

実を言うと、魔理沙は以前にも外来人と会ったことがある。
その際も彼女は魔法を使って見せたのだが、得意の攻撃魔法を見せた結果、過剰なまでに怖がられてしまった。
その苦い経験から、初対面の一般人に自身の魔法を見せることに少なからず抵抗があったのだが。

——おいつ、逃げる！——
——いいからっ、早く逃げろっ！——

迷わず囿になる遊真を見た瞬間、魔理沙の中で確信めいた予感があつた。

ああ、こいつなら大丈夫だ。

だからこそ、魔理沙は躊躇なく魔法を行使したし、呆然とする遊真にわかりやすいように自分の力を見せてやった。

結果的に彼女の予感的中し、遊真は魔法を恐れることもなかった。
た。

それどころか、羨望に近い眼差しすら向けられ、内心相当嬉しかったのは魔理沙の秘密である。



意識が覚醒する。

瞳に映るのは、古い木の天井。

あれ？ と一瞬思ったが、横を見るとすぐにその疑問は氷解した。

「……ああ、そうか」

散乱する物、物、物。

ゆっくりと身を起こし、今までベッド替わりにしていたソファ―に腰かける。

元々このソファ―の上も本が積みあがっていたのだが、さあ寝よう、となったときに、魔理沙がさっさと払い落としてしまった。

その魔理沙はまだ自室で眠っているようで、勝手に部屋に入るのも起こすのも気が引けたので、手持無沙汰な時間が残る。

霧雨、魔理沙。

自身の恩人である少女のことを、改めて遊真は思い起こす。

夕飯の後もう少し話をしたが、何のことはない、ごく普通の人間だというのが遊真の感想である。

彼女の言う『魔法』という力。

それが無ければ、本当に何の変哲もない少女だったであろう。

表情がころころ変わり、素直に感情を出す明るい少女。

意図してのものかはわからないが、その態度は、分らないことだらけの遊真にとって、ひどく安心できるものだった。

今日はこの後、魔理沙の言う『当て』のある場所に行き、恐らくそこで『元の世界』に戻れるのだという。

はたして、このまま彼女と別れてもいいのだろうか。

魔理沙自身は気にするなど言っていたが、やはり思う所があるのが本音だった。

彼女がいなければ、間違いなく遊真はあの三つ首の犬の『妖怪』に喰われ、命を落としていた。

それだけでも大きなことなのに、重ねて一宿一飯の恩。おまけに自分が元の世界に戻るための面倒も見てくれるという。

何もせずに帰ってしまうのは、あまりにも不義理ではないのだろうか。

一度そう考えてしまうと、ますますその思いは膨らんでいった。

返せる恩ならば返すべきというのは当たり前だ。

最もわかりやすいのは何か形で礼をすることである。しかし。

装備品。私服。

ポケットの中。空。

もう幾度も繰り返した作業である。

着の身着のままでの幻想郷に来てしまった自分。

魔法の森の中で目覚めた時も何かないかと散々周りを探してはみたが、財布一つ見当たらなかった。

「ああ、もう起きてたのか？」

横から聞こえた声に振り向いてみると、昨日と同じ魔女ルックに着替えたらしい魔理沙が部屋に入ってきていた。

まだ少し眠たそうで、目が半開きになっている。

「なあ、霧雨……」

「んん？」

何か言おうとはしてみたものの、結局それは見つからず。

「……いや、何でもないよ。ごめんな」

「なんだ、変な奴だな」

謝ることしかできない自分が、とても情けなかった。



手早く朝食を終えた二人は（昨晚のキノコ鍋の残りだった）、庭に出てきていた。

ちなみに、昨日は気付かなかったのだが、実は家の裏も中と同じように、ガラクタなのかそうでないのかわからないようなものが大量にぶちまけられていて、それを発見した遊真が流石に呆れるというやりとりがあったのだが、それは割愛させて頂く。

「で、『当て』っていうのは一体何処なんだ？」

「そういや言っただけだったな、神社だよ」

神社。

これはまた予想外の名前が出てきた、と遊真は思った。

「神社ってことは、巫女さんでもいるのか？」

「ずばりその通りだぜ」

魔理沙が言うには、その巫女さんこそが、『幻想郷』と『外の世界』を隔てる結界、通称『博麗大結界』の管理者なのだという。

これから行く『博麗神社』は、『幻想郷』と『外の世界』の境目に位置する場所にあり、幻想入りした外来人が外の世界に帰りたい場合、その巫女さんの力を借りれば結界を通り抜けることができるらしい。

「何も心配はいらないぜ、ぐうたら巫女だがそうそうヘマをするような奴じゃあない」

とは魔理沙の弁である。

神に仕える職業がそれでいいのか。

それにしても、魔法使いと巫女が二人並んでいる光景を想像してみる。

統一感が無いどころではなかった。和洋折衷もいいところである。

「そこって、結構遠かったりする？」

「そうでもないぜ。私もよく遊びに行くしな」

そう言って魔理沙は、玄関の戸口に立ってかけていた竹箒を手に取り、それに跨った。

……え？

「どうした？ 早く乗れよ」

「いや、おい。それって、まさか……」

魔法使いが箒に跨る。

それはつまり、そういうことなのだろう。

いや、それは分かるが、心の準備ってものが……

「まさか空を飛ぶのが怖いなんて言わないよな、男だろ？」

にやりとしながらそう言う魔理沙は、今までで一番いい顔をしていたらしい。



「……茶柱が折れてる」

博麗神社の巫女、博麗霊夢は、今日も今日とて縁側でお茶を飲んでいた。

毎日毎日飽きないのかと心配になるが、下手に何かがあってストレスが溜まった場合、妖怪を叩きのめすことで鬱憤を晴らすというのだから、いつまでもこうしてもらっていたほうがよっぽど健全なのかもしれない。

しかし本日の彼女は、眉間に皺を寄せて不機嫌そうにしていた。手に持った湯呑の中では、哀れ今生の別れを終えた二つの茶柱の欠片が沈んでいる。

結界の『揺らぎ』を感じたのはつい昨日のことである。

結局その日の残りはほぼ寝て過ごし、何事も無いまま終えた、のだが。

「どうにも悪い予感がするわね……」

具体的には、どこかの誰かさんが、何やら厄介事を持ち込んでき
そうな……

そんなことを考えていた時であった。

「……………」

何か、聞こえたような。

気のせい……いや、違う！

キツ、と西の空を鋭く見つめる。

境内の入口には小さな鳥居が立っているが、残念ながらそれが誰
かにくぐられたことは久しく無い。

なぜならば、立地安全性風評その他諸々の理由で一般人が神社に
やってくることはほとんど無いこと。

そして、『一般人』以外の奴らは大抵空からやってくるからだ。

目を凝らすと、青い空と白い雲の中に、不自然な小さな黒点が一
つ。

そしてその黒点はだんだん大きく、はっきりとしたものに変わっ
ていく。

「いやっほおおおおおう！！」

「ぎゃああああああああああ！！！」

空の彼方から猛スピードで突っ込んできた闖入者^{まりさ}は、そのまま境内に墜落――する寸前でホップするように一瞬高度を上げ、そのまま滑り込むように着地した。

「いよう霊夢！ 今日枯れてんなあ！」

「帰れ」

あまりにも豪快な参上と同時に遠慮の欠片もない言葉を投げかける魔理沙に、少しも動揺せず即座に切り返す霊夢。

これだけでも、この二人の付き合いの長さが分かる様子だった。

「まあ、前口上はそのへんにしてだ。真面目な話だぜ霊夢」

「……真面目な話、ねえ」

珍しいことを言うもんだと、霊夢は眉をひそめた。

「喜べ霊夢。お前に客を連れてきた」

「別に商売やってるわけじゃないわよ。それと……」

魔理沙の後方を指さし、一言。

「客っていうのは、そこで死にかけちゃってる人のこと？」
「あ」

そこには、慣性の法則についていけず、地面に放り出されて突っ伏した遊真の姿があった。



「馬鹿じゃねえの。いや本当馬鹿じゃねえの」

「まあまあ、そんなに怒るなよ」

スリルを求めてジェットコースターに乗る人にはぜひ同じ体験をしてほしい。

次の日から観覧車にすら乗れなくなるだろう。

「幻想郷に来て一番死ぬかと思ったぞ……」

「よかったじゃないか。これでもう余程のことでびびることは無いな」

おかげで朝悩んでいたことが纏めて吹っ飛んだようだった。物理的に。

どうせなら魔理沙のことを良い人と思ったままで帰りたいかった気もする。

「……それで、あなたは外来人、ですよね？」

「っと、ああ、そうらしい」

横から話を振られ、居住まいを正し、体をそちらへ向ける。

「君が、この神社の巫女さんなんだよな？」

「ええ、博麗霊夢です」

短く自己紹介した彼女をまじまじと見つめる。

年のころは、恐らく魔理沙と同じくらい。

紅を基調として白のアクセントを散りばめた服は、確かに巫女服と呼ばれるものである。

少々露出が多めの気もするが。腋とか。

黒くてやや長めの髪を、適当にリボンで括った、という感じの髪型からは、彼女の性格が窺える気がした。

「……俺は、折宮遊真だ。昨日、気が付いたら魔法の森っていう所にて、魔理沙に助けられた」

「幻想入りしたときのことは、何か覚えていますか？」

「それが、さっぱりなんだ」

ふうん、と、あまり気にしていない様子で、霊夢は相槌を打つ。

それを見てから、遊真も話を続けた。

「魔理沙に、君なら俺を『外の世界』に帰せると聞いて、ここまで連れて来てもらった」

正座をし、一度背筋を伸ばす。
それから、深々と頭を下げた。

「頼む。俺を外の世界に帰してほしいんだ」

下を向いたまま、霊夢の返事を待つ。

しかし、いつまで経っても声は聞こえない。

時間が経てば経つほど、不安の芽は成長していく。

遂には、いい加減焦れてしまった遊真が、恐る恐る霊夢の顔を窺った。

そこには、何故か驚いた表情をした霊夢がいた。

「……あのー？」

「……あ、ああ、ごめんなさい」

ようやく我に返った霊夢が、バツが悪そうに視線を逸らす。

「その、こんな風にちゃんとした頼まれ事をされるのが久しぶりだったもので……」

「ええー……」

急にすんと、と肩の荷が下りた気がした。

さっきまで張りつめていた真剣な空気も、いつの間にか跡形もない。

「すみませんね、日ごろ礼儀知らずな奴の相手ばかりしているもので……」

「しょうがないぜ、幻想郷はそんな奴ばかりだからな」

「あんたの事を言ってるのよ！」

とうとう漫才のようなやりとりを始めた二人を見て、思わず遊真は吹き出した。

顔を赤くして怒る霊夢は、ようやく年頃の少女らしく見えた。

あー、こほん。

逸れた話を元に戻すために、霊夢は咳払いを一つ。

「事情はわかりました。すぐに支度をしますから、ちょっと待っていてくださいね」

それだけ言うと、霊夢は立ち上がり、一度この場を去ろうとする。

「……本当に助かるよ。幻想郷に来てから誰かを頼ってばかりだ」「大丈夫ですよ。私は頼られるためにここにいるんですから」

「霊夢とは思えないくらい殊勝な言葉だぜ」

茶化す魔理沙を一睨みしてから、霊夢は部屋を出て、廊下を歩いて行った。



博麗神社の東に存在する『大鳥居』。

この大鳥居こそが、幻想郷と外の世界を繋ぐ扉である。

普段はただの鳥居だが、『博麗の巫女』である霊夢の霊力と、それが込められたお札。

それらを使って作る特殊な術式の力を流し込むことによって、外の世界への道が開かれるのだ。

久々にやる作業ではあるが、手抜きはない。
霊夢はそう確信していた。

「……はい、あとはこの鳥居をくぐるだけです」

それほど時間がかかるような作業ではなく、時刻はまだ昼前、と
いったくらいだろうか。

一仕事終えた霊夢が遊真に話しかける。

「目を閉じて、まっすぐ通り抜けてくださいね」

「……わかった」

鳥居の前に一人、立つ。

流石に緊張が隠せなかったが、深呼吸を一つする。

「じゃあ、行くよ。博麗、本当にありがとう」

振り向いて改めて礼を言う遊真に、霊夢は微笑を返した。

彼女自身、人に感謝されることに慣れておらず、内心相当こそば
ゆく思えていたりする。

「魔理沙も。お前に会えて本当に良かった」
「ん？　おお、私も楽しかったぜ」

ずいぶんあっさりとした態度だが、それくらいの方がむしろ有難いのかもしれなかった。

鳥居に向き直り、目を閉じる。
たった数回、両足を交互に動かすだけである。何も失敗する要素は無い。

一步一步、踏みしめるように。
確かに遊真は、大鳥居をまっすぐ通り抜けた。

たったそれだけで、霊夢と魔理沙からは、遊真の姿が陽炎のように歪んで見える。

はず、だったのだが。

「……………」

「……………」

「…………あれ？」

三人分の三点リーダーがずらり。

そこには、しっかりと大鳥居を通り抜け。
そのまま棒立ちしている遊真の姿があった。

「ちょ……!」

すぐに霊夢が鳥居に駆け寄り、施した術式の様子を見る。

「……正常に作動してる。どういうこと?」

「とりあえず、もう一回やってみたらどうだ?」

魔理沙の提案の通り、もう一度目を閉じ、鳥居をくぐり直す。
しかし、結果は変わらなかった。

「今までこんなことがなかったのに……」

ぶつぶつと何かを呟きながら考え込んでしまった霊夢を心配そう
に見つめる遊真。

しばらく沈黙の時間が続く、が。

「……あっ」

最初に何かを思いついたのは魔理沙のようだった。

「なあ霊夢、これ、外の世界の何処に繋がっているんだ?」

鳥居を指差しながら、最もな疑問を尋ねる。

「知らないわよそんなの。通り抜ける人……この場合、遊真さんの
『記憶』を術式が読み取って、その場所まで飛ばすの」

何でもないことのように霊夢は答える。しかし。

「あ」

「ああー……」

「……え、何？ 何なの？」

ようやく合点のいった遊真と、その言葉の意味を知る魔理沙は揃って空を仰いだ。

□ ■ □ ■ □ ■

「そんな大事なことは先に言ってくださいよ……」

「いや、面目無い……」

遊真の記憶のことを聞いた霊夢は疲れた様子で溜息を吐いた。結果的に彼女のやったことは無駄だったのだから無理のないことかもしれない。

「それにしても、記憶の欠落ですか……」

考え込む仕草をする霊夢だが、表情は優れない。

「霊夢でも聞いたことがないなら、前例がないのか？」
「かもしれないわ。大昔のことまでは分からないけどね」

未だ年若い霊夢だが、博麗の巫女として、既に何人もの外来人を
外の世界に送り返しているという。

しかしその彼女でも、このように記憶を無くしていた外来人は知
らないという。

「つてことは、少なくとも記憶を取り戻すまでは、俺は帰れない訳
か」

「そういうこと、ですね……すみません」

「いや、博麗の謝ることじゃないって、うん」

謝る霊夢を制し、頭をぱりぱりと搔く。

「ただ、記憶を取り戻すって言っても、これからどうすればいいの
か……」

「そうですね……」

一口に記憶喪失と言っても、種類はいくつもある。

遊真の場合、まず一般常識のようなことは一通り覚えている。

抜け落ちているのは、いわゆる個人の『思い出』という奴であり、
それについても、多少特殊な形ではあるが、思い出せるものとそう
でないものが混在している状態である。

「そもそも、原因がわからないんだもんなあ……」

基本的に、記憶喪失の原因は精神的なものによることが多い。

他にも、頭部に物理的な外傷を負った際に発症することもある。

治療法としては、催眠療法によって想起を促すことのできる場合
もあるが、基本的には時の流れが解決してくれるのを待つのみであ
る。

「……何だったら、しばらく神社に居てもいいですよ？」

「え、いいのか？」

思いもよらなかった助けの手に、遊真は驚く。

「ああ、そりゃいいな。ここはいろんな奴が来るからな。丁度いい刺激になるんじゃないか」

「まあ確かに、不本意ながら変な奴がよく来ますからね……あんたみたいな」

「何だったら、私の家に来てもいいぜ？」

「あんたの家は人が住めるところじゃないわ」

容赦無く物を言う霊夢。

苦笑するのみだったが、遊真も内心同意見だった。

「でも、本当にいいのか？ 俺、特別なことは何もできないと思うけど」

「もちろん、掃除とか、そういうことはやって貰いますよ？ でも、ここは広いですし、そこまで貧乏って訳ではないですから」

お茶を啜りながらそう言う霊夢。

案外便利な働き手が見つかったとでも思っているのかもしれない。

「そういうことなら、できる限りのことはするよ。……あれ、でもさ」

ふと一つ、遊真に疑問が湧いた。

「俺以外にも普通の人間っているんだろ？　その人たちはどこで暮らしてるんだ？」

「ああ、人里があるんですよ。ただ、そこまで歩いていくのは危ないんです」

「人食い妖怪が出るからな。里の中まで入っちゃえば安全なんだが」
「ふうん……」

確かに、自衛手段の無い遊真にとって、それは無謀とも言える行為である。

霊夢や魔理沙の助力があれば、そこに住むことも可能であろうが、そもそも幻想郷の文明のレベルは外の世界で言う明治時代程度である。

一人暮らしをするにしても、家事の仕方も遊真の知るそれとは随分勝手が違う。

順応するにも中々苦勞しろうで、記憶を取り戻すところではなくなってしまうだろう。

「……じゃあ、博麗。悪いけどよろしく頼むよ。」

「はいはい、それじゃあ境内の掃除からお願いしますね」

年下の少女と一つ屋根の下、と考えれば、抵抗が無いわけではない。

しかし前向きに考えるのなら、現在進行形で世話になる二人に何らかの礼を返すチャンスにもなるのではないだろうか。

こうしてひとまず、遊真は博麗神社へと厄介になることとなった。

#3 時には頭の切り替えも大事（後書き）

主人公、ヒモにジョブチェンジの巻

記憶とか結界とか、相当適当言ってます。
ご都合主義万歳

#4 しっかり前を向いて

「……買い出し？」

「ええ、そろそろ食料の備蓄が切れそうなので」

遊真が博麗神社に居候するようになって早三日。

日課となった境内の掃き掃除を終わらせた彼に、霊夢が声をかけていた。

幻想郷には電化製品が無い。そもそも電線が通っていないのだから当たり前だ。

河童と呼ばれる種族がそのような発明を行ってはいるが、まだまだ実験段階であり、一般的に普及するにはまだまだ時間がかかりそうである。

ともかくして、電化製品が無いのだから、勿論電気冷蔵庫も存在しない。

必然として、食材の保管できる期間は外の世界のそれより短くなり、より頻繁な補充が必要となる、という訳だ。

「つてことは、人里に行くのか」

「ええ、荷物持ち、お願いしますね」

「……なるほど」

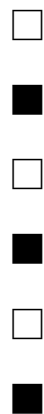
確かにそういう役目は居候である自分が負うべきだろう。と、遊真は納得する。

それを抜きにしても、単純な興味から、一度人里に訪れてみたいとは思っていた。

「よっし、分かった。任せてくれ」

「はい。それじゃあ支度してきますね」

ちなみに、この博麗神社で暮らすようになって、遊真が一番学んだことは落葉の効率の良い集め方とおいしいお茶の淹れ時である。自分の記憶のことを、うっかり忘れそうになっていた。



博麗神社から人間の里までは徒歩で一時間弱といったところである。

いつも霊夢は空を飛んでいくのでもっと早く着くのだが、遊真がいるため二人で歩いていく事となった。

霊夢が遊真を抱えて飛ぶことも出来なくはないのだが、羞恥心と魔理沙との経験という二重の理由で遠慮した。

道中、妖怪に襲われないか、内心ひやひやしていた遊真だったが、驚くほど平和に里へと辿り着いた。

というのも、ストレス発散に妖怪を叩きのめす霊夢の悪名？は彼らの中で相当広まっており、低級な妖怪の場合、彼女の姿を見ただけで泣きながら逃げていくのである。

そしてそうではない妖怪の場合は、そもそも意味も無く博麗の巫

女を敵に回そうとはしない。

もちろん、この時の遊真がそんな事実を知る由は無い。

「結構賑やかだな」

「いつもこれくらいですよ」

規模はそれほど大きくないが、少し入っただけでその活気の良さは充分伝わってきた。

幻想郷で商売をする種族はほとんどが人間であり、それ故にほとんどの店は人里に集まる。

また、人間に友好的な妖怪が人里まで買い物に訪れることも多く、結果としてどの店もある程度は繁盛しているようである。

まあ、基本的にほぼ全ての人が農業と店先での商売をしているのだから、元々陽気でおおらかな性格の人が多いだけかもしれない。

「遊真さん、ちょっといいですか？」

「ん、何だ？」

きよろきよると忙しく周りを見回す遊真に、霊夢が声をかける。

「これから野菜を買いに行きますけど、絶対に、傍を離れないでくださいね」

「お、おう……」

やけに真剣な表情で絶対、を強調する霊夢に、遊真は違和感を覚えた。

里までの道中ですら、飄々とした態度を貫いていた彼女。

安全であるはずの里の中に、それほどまで警戒が必要な場所があるのだろうか？

疑問に思う遊真であったが、さっさと歩き出してしまった霊夢を見て、慌ててその後を追いかけた。



「あら、霊夢じゃない。ゆっくりしていつてちょうだい」

辿り着いた先は里の隅でひっそりと開いていた露店だった。

素人目でも瑞々しく美味しそうな野菜が並んでいて、なるほど霊夢がここをチョイスするのもわかる、の、だが。

その露店の主が問題だった。

女性らしい体系に、白いシャツに赤いチェックのベストとスカートを身にまとい、緑の髪を肩のあたりで切り揃えている。

たおやかに微笑む姿はどこか妖艶で、どこから見ても美しい女性……なのだが。

なぜだろう、一目見たときから、遊真は震えと冷や汗が止まらなかった。

意識とは別の、本能のような感覚で。

すぐにこの場を立ち去らなければいけないような。

なんとなく、僅かな刺激で爆発してしまう爆弾を目の前にしているような……。

「悪いけど急いでるのよ。これと、これと……」

そんな遊真の心境を酌んでくれたのかは分からないが、素早く品物を選んでいく霊夢。

恐怖に怯える遊真にとってはそんな彼女の姿が天使のように見える。

さすが霊夢大明神様。内心彼女を崇めていたくらいだ。

「ふんふん、それなら……これくらいかしらね」

一品ずつ値段を紙に書き、霊夢に見せる露店主。

「……あんた私をなめてるの？ もっと負けられるでしょ普通」

「（霊夢……！！）」

どうしてこんな時にあなたはそう喧嘩腰なのでしょう。

嗚呼、神は死んだ。もう泣き出したかった。

「おお怖い怖い。そうね、『面白い話題』を提供してくれたことだし、ちよつと負けてあげましょうか」

「……面白い話題？」

「ええ、とっても愉快だったわ……ねえ、そちらの方？」

そう言って露店主はこちらに流し目を送ってくる。
それだけで、遊真は心臓が止まりそうになった。

「ど、ドウモはじめまして、折宮遊真とモウシマス」

「あら、これはご丁寧に。風見幽香かざみ ゆうかよ」

それでも、なんとか自己紹介をやったのけるあたり彼の度胸もなかなかのものだろう。

多少片言になってはいたが。

「……ちよっと幽香、遊真さんが何か関係あるの？」

「知らないのかしら、もう結構広まっているのだけど……ほら」

そう言うとき幽香は、傍に置いてあった紙の束——新聞を霊夢に渡す。

その表紙に目を通し……霊夢が固まった。

不思議に思った遊真も、後ろからそれを覗き込む。

「……………げえっ!？」

一番上の題字には、『文々ぶんぶんまる。新聞』の文字。
その下の大見出しには、こう書かれていた。

『博麗の巫女、禁断の同棲生活!？』

その横には、何時の間に撮られたのだろう。着流し姿（霊夢から借りた）の遊真と、いつもの澄ました顔の霊夢が、二人でお茶を飲んでる写真が大きく載せられていた。

確かに見ようによっては、仲睦まじい夫婦の姿に見えなくはない。やや年寄染みてはいるが。

「それにしても、あの天狗が慌てて飛んで行ったから何事かと思ったら、まさかあなたのスキャンダルだとはねえ」

「へっ!？ ああいや、これは……です……ね……」

慌てて弁解しようと思った遊真だったが、隣の霊夢の様子に気づき、閉口する。

「……あのデバガメ天狗………潰すっ……」

幽香の十倍怖かった。

下を向いていて表情は窺えないが、なんか禍々しいオーラ放ってる。

気が付けば、何やら危険を感じ取ったのか、周りの人々はみな避難済みである。

逃げ遅れた哀れな子羊あすまは一人だけ。

「いやあ驚いたわあ。知らない仲ではないのだから一言言ってくればよかったのに」

「（分かってるよ！ この人全部分かってて言ってるよ！）」

幽香の口調は明らかに芝居がかっている。

それがまた火に油を注いでいるようで、霊夢の放つ気迫は次第に大きくなっている。

「ねえ幽香……ちょっと付き合いなさいよ……」

「あら、やあねえ。旦那の前で私を誘うつもり？」

——ああ、終わった——

正に一触即発。もはやこれまで。
遊真が観念した時だった。

「そこまでだっ！」

鋭い声が一つ。

新たな人物が、二人の間に割って入っていた。

「いくらあなた方でも、里の中でもめ事を起こすのはやめてもらおうか！」

白銀の長髪。

小さな四角い箱のような帽子を被った、背の高い凜とした雰囲気
の女性。

「……わかっているわよ、ちょっとしたお遊びじゃない」

先に矛を収めたのは幽香だった。

肩を竦め、苦笑してみせる。

「あなたの場合は冗談では済まないだろう……彼も怖がっているで
はないか」

そう言うとその女性は、固まっている遊真を気遣うような様子を見せる。

「貴方が霊夢と同居しているという方だな？ 話は聞いているよ」

「ちょっと慧音、あんたまであいつの新聞を信じてるんじゃないで
しょうね？」

慧音、と呼ばれた女性は溜息を一つ。

「あのゴシップ誌を鵜呑みにする者はそうそういないよ。まったく

……」

「……あのー」

ようやく事態の鎮静を理解した遊真が、恐る恐る声をかける。

「っと、ああ、済まない」

何やら気疲れした様子の彼女だったが、すぐに元のように表情を引き締める。

「上白沢慧音^{かみしらさわ けいね}だ。この里で教師の真似事をしている」

「あ、初めまして。折宮遊真です」

「君は、外来人のように見えるが」

「ええ、その通りですよ」

教師、と聞くと、ついこちらの背筋も伸びてしまうのは、自分が学生であつたのことの裏付けなのだろうか。

そんなことを考えながら、本日二回目の自己紹介をする。

「で、霊夢。いつ御代は頂けるのかしら」

「ああもう、分かったわよっ」

視界の端では、まだ多少イラついている霊夢がお金を支払っていた。

「しかしまた、どういった理由で？」

「ああ、それはですね……」



「なるほど、記憶か。……それは厄介だな」

本来の目的である買い物を遂行しながら、同行している慧音にこれまでの経緯を話した。

彼女としても、突然神社で暮らし始めた男性の事情は気になっていたらしい。

「はい。どうも博麗もこんな事例は知らないらしくて、実際手詰まりですね」

「ふむ……いや、待てよ」

しばらく何かを考えていた様子の慧音だったが、何かを思い出したような仕草を見せる。

「そういうことならば、稗田阿求殿を訪ねてみてはどうだろう」

「あー、いたわねそんな奴も……」

ひえだの あきゅう
稗田 阿求。

どうやら霊夢も知っているようだが、もちろん遊真には聞いたことのない名前である。

教師である慧音が敬意を表した呼び方をするのだから、一体どのような人なのだろうか。

「阿求殿は、『幻想郷縁起』という書を記されていて……まあ、この幻想郷の歴史に深く関わっておられる方だ。私でよければ紹介させてもらうが」

「なるほど……」

それならば、確かに話を聞いて損ではないだろう。

もし昔に似たような事例があったのなら、何か参考に出来ること

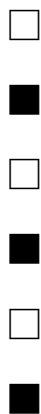
があるかもしれない。

「いいんじゃないですか？　わたしは先に買い物を買わせておきますし」

「ありがとう霊夢。それじゃあお願いできますか？」

「わかった。では行こうか」

後で里の入口で落ち合うことを決め、一旦別行動を取ることになった。



「済まないな阿求殿。急に訪ねてきてしまつて」

「いいえ、構いませんよ。私としても、あなたの訪問は喜ばしいことですから」

稗田邸は、それはそれは立派な建物だった。

木造建築の大きなお屋敷に、こういうのを『趣のある』というのだろうか、池付きの広い庭。

歴史の教科書から抜け出してきたような外観である。

玄関で阿求の従者だと名乗る人物に出迎えられた時、なんとなく遊真は軽い感動すら覚えた。

「それで、本日はどのようなご用向きですか？」

そして、今彼らの目の前にいる少女こそが、稗田阿求その人である。

儂げな少女、というのが遊真の第一印象であった。

首筋まで流した藤色の髪は耳元を完全に覆っており、頭には小さな花飾りをつけている。

着物に包まれた体は線が細く、押せば倒れてしまいそうだった。

「実は、こちらの彼なのだが……」

「初めまして、折宮遊真です」

慧音に促され、正座をして名乗る。

自然と気が引き締まるような感覚がした。

「外来人の方、ですよ？ ひょっとして、最近博麗神社の方にお住まいになっているという……」

「ええ、そのことなんです……」

例の新聞はここにも出回っているらしい。

幽香の話を信じるならば、おそらく里中に広まっているのだろう。

若干頭が痛くなりそうだったが、ともかくとして、事情の説明を始めた。



「なるほど、それで私を……」

慧音のフォローもあり、説明は手短に完了した。
流星にこれで四回目ともなれば慣れたものである。

「阿求殿は、他に記憶を無くした外来人の話を聞いたことがお有りだろうか？」

「申し訳ありませんが、私にも分かりかねますね……」

しかし、どうやら阿求にも、心当たりは無いようだった。
空振りか……と、遊真は落胆を隠せなかった。

「すみません。わざわざお越し頂いたのに……」

「ああいや、お気になさらないで下さい。こっちが勝手に訪ねてきただけですから……」

本当に済まなそうにする彼女を見て、慌てて遊真は頭を下げた。
阿求の所作は一々正にいい所のお嬢様のようで、見ているこっちが畏まってしまう。

「書に残されていないという事は、恐らく前例の無いことなのでしょうが……。なにぶん、『転生』の際に大半の記憶は失ってしまうもので……」

「……………『転生』？」

『転生』。遊真の頭上に疑問符が浮かぶ。
これまたファンタジーな言葉ではあるが、どういふことなのだろう

うか。

「阿求殿は、その、『一度見たものを忘れない程度の能力』という力を持っているのだが……」

「この力を使い、人々のために『幻想郷縁起』を執筆するのが『御阿礼の子』の使命であり、私はその九代目なのです」

言い難そうにする慧音を引き継ぎ、阿求本人が説明を続ける。

「この能力は私の先祖である『稗田阿礼』のもので、私たち一族は『転生』によってこの能力を引き継ぎ、1200年ほど前から縁起の編纂が続けている、という訳なのです」

「へえ……」

なんともスケールの大きい話である。

遊真は感心するだけしか出来なかった。

「じゃあ、阿求さんも今、縁起を執筆中なんですか？」

「はい。と言っても、私の編纂はそろそろ終わりなんですけど」

「……え？」

なにやら違和感を覚えた。

阿求は見た目からして10歳と少しぐらいの幼い少女である。

普通に考えれば、その代の寿命ぎりぎりまで編纂を続け、それから『転生』とやらをするのではないのだろうか。

そう思う遊真の内心を見透かしたように、阿求は微笑んで言葉を続ける。

「『転生』というのは、何年もの下準備が必要な事なんです。それ

に、御阿礼の子の寿命はなぜか短くて、30歳まで生きることはいかないのですよ」

「なっ……!？」

何でもないように言う阿求だったが、遊真は絶句した。

30歳まで生きることの出来ない寿命。

現代人である遊真の感覚からすれば、それはあまりにも短すぎる。しかも『転生』に必要な期間や縁起の編纂の手間を考えれば、彼女の自由などほとんど無いようなものではないか。

「……それに、『転生』のためには、死後閻魔の元で百年余り働かなければならないんだ」

慧音の補足もまたぶっ飛んだ内容だった。

彼女が言い辛そうにしていた理由を遊真はようやく理解する。確かに、見知らぬ人に好き好んで話すような内容ではない。

「すみません。お聞き苦しい話だったでしょう？」

だというのに、肝心の本人はにこやかに笑っている。

それどころか、こちらの心配までしてくる始末である。

「……辛くないんですか、そういうの」

馬鹿な質問だとは分かっていたが、遊真はそう聞かずにはいられなかった。

生まれた時からそんな運命が定められているとすれば、少なくとも自分は耐えられる気がしなかったからだ。

それを聞いた阿求は、困ったような笑いを浮かべる。

「辛くなかったわけではありません。でも……」

一度言葉を切り、外を見渡しながら。

「最近では、そう悪いものではない、と思っています」

どこか憂いを秘めたような瞳をしながらも、確かにそう言い切った。

転生の度に人間関係がリセットされてしまうことは、御阿礼の子にとって長い間悩みの一つだった。

記憶の片隅に残る友人たちはみな寿命を終えていて、その死期に立ち会うことも出来ない。

しかし、最近の幻想郷は人間と妖怪の間の距離が大分縮まっている。

妖怪の中には、数千年を平気で生きる種族も少なくない。

そういった妖怪の友達が最近阿求には出来たそうで、そう転生を苦に思うことは無くなったそうだ。

そう言う阿求の姿は、遊真にはやけに眩しく見えた。

「そうだ、よろしければ、外の世界の話をお聞かせ願えませんか？」
「……外の世界、ですか？　しかし……」
「難しいことかもしれません。ですが、言葉にしている内に何か思
い出すこともあるかもしれませんよ？」

名案を得た、とばかりに、ぱっと阿求の表情が明るくなる。

「最近紅茶というものを知ったのですが、あれはいいものですね。
ああそれと、外の世界の音楽を聴ける道具を河童の方に作って頂い
たんですよ。よろしければ、聴いてみますか？」

そう言って笑う阿求は、正に花が咲いたようで。
遊真はしばらく、それに見惚れていた。



「では、この辺りで」

「はい。上白沢さん、わざわざありがとうございました」

「慧音でいいよ。呼び辛いだろう？」

あれからしばらくの間阿求と談笑し、その後に彼女と別れを告げ、
遊真は慧音と共に待ち合わせ場所の里の入口に来ていた。

「記憶のことは分からなかったけど……それでも、良かったです」
「……そうか、それは何よりだな」

あまりに過酷な境遇。しかし彼女はあんなにも楽しそうに笑っていた。

それを思うと、遊真は清々しいような、どこか恥ずかしいような気分になった。

慧音も、そんな彼の表情を見て、何か思う所があったようである。

「何か私が力に慣れることがあったら、遠慮なく頼ってくれ」

「覚えておきますよ。ありがとうございます」

「うん、それでは」

そう言う彼女は、背を向けて去って行った。

そろそろ日が暮れそうだが、霊夢はまだ来ていないようだ。ひよっとしたら、あの調子でまた値切って回っているのかもしれない。

——また、お話を聞かせてくださいね？——

別れ際に阿求が言った一言である。

自分も彼女のように強く生きられるだろうか。

自分は、彼女の綴る歴史の一部分になれたのだろうか。

「（また、遊びにいったらいいな）」

その時までには、何か彼女を喜ばせられるような話を思い出して

おこう。

そう、固く決心した。

#4 しっかり前を向いて（後書き）

うちのゆうかりんは少しマイルドかもしれません。

人里に買い物に来ることは普通にあるそうなので、じゃあ金策に野菜くらい売っててもおかしくないな！ということではぶっこんでみました。

どこかで見た設定な気がする。

書いてて思った。あれこれあつきゅんヒロインじゃね？

#5 常識は投げ捨てるもの（前書き）

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。
習作ではありますが、なんとか続けられるよう頑張りますので、これからもよろしくお願い致します。

#5 常識は投げ捨てるもの

「なあ、魔理沙。ちょっといいか」

「ん、なんだ？」

博麗神社、春の兆しが見えるうらかな午後。

遊びに来ていた（昼飯をたかりに来たとも言う）魔理沙に、遊真は声をかけていた。

ちなみに、遊真が彼女のことを名前で呼ぶようになったのは、彼女自身の希望による。

魔理沙曰く、苗字にあまりいい思い出が無い、だぞうで、断る理由もない遊真はそれを承諾した。

「魔法ってさ、俺でも練習すれば使えるようになったりするのか？」

「おいおい、どうしたんだいきなり？」

「……ちよっと思う所があったんだよ」

思う所、というのはもちろん、先日の稗田邸訪問のことである。

あの後、遊真はもう一度自分を見つめ直した。

記憶に関しても、時の流れが解決してくれるのを待っている状態である。

ここままではいけない。時間とは有限であることを改めて思い知ったのだ。

しかし、ではどうすればいいのか。

そう考えた時、真っ先に思いついたのはやはり恩返しのことである。

現状、彼は周りの好意に甘えているだけに過ぎない。

このまま帰れたとしても、後悔が残るのは明白だ。

記憶の事はともかくとして、まずはそういう方針で動くことを決めた。

まず第一の問題としては、行動範囲の狭さである。

霊夢や魔理沙の助けが無ければ、神社の外にすら出ることができないのだ。

少なくとも、里まで一人で行けるようになれば、簡単な使いは出来るし、何か仕事を探すことも出来る。

ならば必要となるのは、妖怪からの自衛手段である。

その時、遊真が思いついたのが、魔理沙が見せてくれたあの『魔法』だったのだ。

「で、どうなんだ？」

「まあ、私も最初っから魔法使いだった訳じゃないしな。ある程度は才能も必要だが……ああ、そうだ」

考え込む魔理沙だったが、ふと何かに気付いたようだった。

「遊真。私とお前が最初に会った時、あの森でどれくらい迷ってた？」

「あの森って、『魔法の森』か？ あー……」

質問の内容にやや疑問を覚えながらも、遊真は回想する。

あの衝撃的な記憶は、時間が経ってもそうそう薄れそうにもない。

「目が覚めて、しばらくはぼーっとしてたし……はっきりしないけど、一時間弱くらいか？」

「何か体に異常はあったか？」

「特に覚えはないけど」

「そうか。よしよし、それなら素質アリだぜ」

「……何で？」

回答を聞いた魔理沙は、満足げににやりと笑うと、一つ頷いて見せる。

「あの森が何で『魔法の森』って呼ばれてるか、知ってるか？」

「何でって、そりゃあ……魔法使いの住む森だから？」

この場合の魔法使いとは、遊真の目の前の『霧雨魔理沙』のこと。それと、彼はまだ見ぬ『もう一人の魔法使い』のことである。

「いいや、逆だぜ。『魔法の森』だから、魔法使いが住むんだ」

「……あの森、何かあるのか？ 魔法使いを惹きつけるような」

魔理沙の言葉を聞いて、遊真はそう推測した。

案外、頭の回転は速いようである。

「あの森はな、常に『瘴気』を放ってるんだ」

「……なんか不穏な響きがするんだけど」

瘴気。

この間霊夢が町で放ってたやつみたいなものだろうか。

「森自体が持つ妖気と、自生する化け物茸が放つ胞子。これのせいで、普通の人間は森に長時間居ると命に係わる事態になる」

「そんな大事なことは先に言えよ！」

なんともぞつとする話に、思わず遊真は冷や汗を流した。

妖怪に追い回されていなくても、長居すればどの道危険だったのである。

「まあ待て、この瘴気は確かに危険だが、耐性のある者に対しては魔力を高める効果があるんだ」

「……なるほど」

つまりその効果こそが、彼女たち魔法使いがその森に住む理由なのであろう。

「ってことは、つまり？」

「特に何の変調も無かったお前は、魔力の素養があるって事だ」

「マジか！」

「何だったら、基礎くらいは私にも教えられるぜ」

正に渡りに船だった。

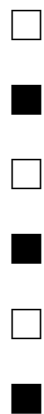
すんなり行きすぎて気味が悪いほどである。

「魔理沙大先生、よろしくお願いします！」

「はっはっは、くるしゅうない」

「……息合ってきたわね、あんたら」

ぺこぺこ頭を下げる遊真と、腰に手を当ててふんぞり返る魔理沙を、どこか冷めた目で霊夢は見ていた。



博麗神社の境内に、遊真と魔理沙は向かい合って立っていた。

「いいか、魔法を使うには一に集中、二に集中だぜ！」

「はい、先生！」

もはや二人ともノリノリである。

一応遊真の方がいくらか年上なのだが、そんな威厳は何処にも無かった。

元々そうだった気もする。

「と言っても、そんな難しいことじゃないぜ。弾を撃ったり空を飛んだりは、ここじゃ別に普通の事だからな」

「……それがすごいよなあ、もう」

ひょっとしたら、幽香や慧音も空を飛ぶのだろうか。飛ぶんだろ
うなあ、たぶん。

価値観が崩壊しつつある遊真であった。

「まずは基礎の基礎からだ、片手に『魔力』を集中させる」

魔理沙が顔の前に持ってきた右手が、虹色に光り始める。

「……いや、まずその感覚がわからないんだけど」
「イメージだよ、イメージ。目の前に実物があるんだから楽なはずだぜ？」

——イメージ、ねえ。

魔理沙が放つ光を注視する。

それを見た遊真は、なんとなく、温かそう、と思った。
実際の温度の事ではなく、感覚的な方の温かさである。

見よう見まねで、右手に力を込めてみる。

『光』のイメージ。そう考えた時、遊真には一つ心当たりがあった。

魔法の森の中で、呆然とする自分に魔理沙が見せてくれたあの光。
自分が初めてはつきりと目にした『魔法』。

それは、小さな小さな、それでも確かな、『光』だった。

右手が熱を持った気がした。

いつの間にか閉じていた目を、驚きとともに開く。

「……………あ……………」

白い『光』。

魔理沙のものとは色は違うが、確かにその光は遊真の右腕を包ん

でいた。

「次だ。魔力の『流れ』を意識しながら、右手の光を全身に循環させる」

「……………」

循環、循環。

魔理沙の言葉を頭の中で反復しながら、再び目を閉じる。

そう、まるで血液のように。

右手の魔力を、『力』を感じながら、それを体の中に浸透させる。

頭のとっぺんから、足の指の先端まで。

心臓の鼓動が速まるのがわかる。

一瞬、息が詰まった後に、水の中に潜ったような感覚がした。さらにその後、体の芯が熱くなる。

一度大きく、深呼吸をしてから。

ゆっくりと、目を開けた。

「……なんか、へんなかんじだ」

右手の光は既に消えている。

しかし、体の中の熱は、おぼろげに感じられる。
心臓はまだ、うるさいくらいに音を立てていた。

「今ので、自分の中の魔力を体が自覚したんだ。そうだな……」

少し考えるような素振りを見せてから、魔理沙は跳躍する。
着地したのは境内の石畳ではなく、神社の屋根の上だった。

「ほら、ここまで跳んでみろよ」

「そう、言われても……」

遊真の立つ地面から屋根までの距離は、ざっと3メートルと少し
ぐらいである。

当然、普通の人間が跳び越えることのできる高さではない。

「魔力の使い方を体で覚えるんだ。それさえ出来れば簡単な事だぜ」

魔理沙の急かす声に覚悟を決め、助走のための距離を取る。

「……………ふっ！」

体の熱を、魔力を意識しながら走り、1ステップ入れてから、両
足で思いっきり踏み切る！

「って、おおっ!？」

急激に切り替わる視界に混乱する。

不思議な浮遊感と共に、青色が見える。

それが空だと気付いた時にはもう、落下は開始していた。

(どすんっ！)

「あだっ!？」

そんな状態で綺麗に着地できるはずもなく、見事に尻餅をつく。

「ちょっと、気を付けてくださいよ!？」

真下から、霊夢の非難の声が聞こえてきた。

「……真下？」

そう、真下。

遊真が今座り込んでいる瓦の下から、霊夢の声がするのだ。

「第一段階、身体強化。成功だぜ。おめでとさん」

すぐ傍から、今度は魔理沙の声が聞こえる。

その時初めて、自分が屋根の上にいることに気付いた。

「飲み込みが速いな。これはひよつとすると化けるかもだぜ？」

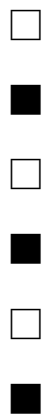
体が再び熱に包まれたのがわかる。

それは魔力による熱ではなく、感動から来る高揚だった。

初めて魔法を見た時と同じ、童心に帰ったような純粋な心の奮え。

その喜びを噛み締めながら、魔理沙が差し出してくる手を取った。

———これが、現在から一週間前の事である。



朝。太陽が上ると共に起床。

最近では霊夢よりも早く起きるようになってきた遊真は、彼女が起きるまでの間、精神統一し、魔力のコントロールの修行に励む。

修行といっても大したものではなく、体の中の魔力を感じ、『流れ』を速めたり、ゆるやかにしたりを繰り返すだけである。

それでもそれなりの効果はあるらしく、日に日に感覚が鋭く、研ぎ澄まされていくのがはつきりとわかるようになった。

霊夢が起きてくると、朝食の手伝いをする。

初めこそ何もできなかった遊真だが、霊夢の指導のもと、なんとか一通りの調理器具の扱いを覚えてきた。

技術を吸収する事に長けていたらしい彼は、今では簡単な軽食程度なら一人で作ることができる程にはなっていた。

余談だが、彼が一通りの料理を作れるようになったなら調理は全部投げて楽をしよう、と密かに考えている霊夢であった。

朝食後は、箒や雑巾を手に神社内の掃除をする。

彼が居候を始めてから、博麗神社が一段と清潔になったのは言うまでもない。

「これ、で、終了っ！」

この掃除も、日が経つごとにどんどん時間が短縮されている。

「よう遊真、今日も精が出るな」

「なんだ魔理沙、またたかりに来たのか」

「違うな、御呼ばれして来たんだ。呼ばれてないけど」

「つまみ出すぞ」

神社に来る魔理沙とも軽口の叩き合いも慣れたものである。

最も、勝てた覚えは一度もない。

「なんかお前、居候というより家政夫みたいになってるな」

「言うな……自分でも悲しくなってくる」

今の立場に特に不満がある訳ではないが、霊夢の自分への扱いがぞんざいになってる気はしていた。

もとから上がらなかった頭は、彼女の武勇伝？を知るたび更に低くなっていく。

家事の分担も彼が受け持つ量はどんどん増えていた。

「遊真さーん、薪割りお願いしますねー」

「りようかい……」

「哀れだな……」

せめてもの腹いせに、魔理沙に恨みがましい視線を投げかけてから、自分に与えられた任を果たすため、遊真はその場を去った。

「……………おい、霊夢。ちよつといいか」

「……魔理沙？　なによ、またたかりに来たの？」

「それはもうさっきやったぜ」

遊真が見えなくなったのを確認してから、魔理沙は奥にいる霊夢に話しかける。

「どうなんだ？　遊真の奴の、あれ」

「進展無し、よ」

返答を聞いた魔理沙は、眉をひそめ、がしがしと乱暴に頭をかく。

「おっかしいよなあ、もう充分すぎるくらいのレベルなのに」

「わからないわよ、私は魔法は専門じゃないし」

霊夢の声も投げやりではあるが、僅かに困惑が混じっていた。

「あんたもマメよねえ。ここのところ毎日じゃない」

「だって気になるだろ？　魔力制御は日に日にうまくなってるのに

――」

――弾幕が、撃てないなんて。



「……せいっ！」

手斧を振り上げ、垂直に振り下ろす。

ぱかんっと軽快な音を立てて、小さな丸太が二つに割れた。

『身体強化』の影響もあり、体に特に負担はない。

実はこの『身体強化』自体、使いすぎると筋肉痛の元になるのだが、鍛錬の意味も込め、遊真は出来るだけ様々な場面で使うようにしていた。

「……………」

粗方の木を割り終えた遊真は、薪の一つを手にとると、それを的に見立てて地面に垂直に立てる。

数歩後ずさりをして、右手の手のひらを薪へと向ける。

ほどなくして、遊真の右手が白く光り出す。

魔力を集中させるスピードも、最初と比べずっと早くなっていた。だが、それだけである。

「やっぱり、ダメか……」

魔理沙による指導は、既に次の段階に移っていた。

集中した魔力を『弾』にし、発射する。

幻想郷の少女たちの間では『弹幕』と呼ばれるそれも、やはり基本事項の一つである。

ただ、遊真にはそれが出来なかった。

それも、原因不明。

魔理沙が見ても霊夢が見ても、遊真の魔力制御はもはや完璧と言ってもいい。

それなのに、何度やっても、どんなに粘っても、遊真の手から光弾が発射されることはなかったのだ。

「……へこんでもいられないな」

とにかく、やれることをやる。

弾幕が撃てなくても、日々の努力の成果は確実に現れているはずなのだ。

気持ちを切り替え、霊夢たちのところに戻ろうとしたときだった。

「あやや、こちらにおられましたか！」

「へっ？」

突如聞いたことのない声が空から降ってきた。

反射的に振り向いた遊真の前に、風圧と共に人型の何かが降り立つ。

「初めまして！ わたくし、射命丸文と申します！」

人型の正体は、一人の少女だった。

快闊な笑みを浮かべる少女は、黒髪を風にたなびかせながら名乗りを上げる。

首からカメラのようなものを下げているのが見えたが、それよりも、遊真の視線を引き付けてやまないものがあつた。

「……羽が生えてる」

「それはもう、鴉天狗ですから、羽くらいありますとも」

「そうか、天狗か。それなら何もおかしくないな」

ああ、俺も幻想郷に馴染んできてるなー。

しみじみ遊真思う遊真であつた。

――はて、天狗？

なにやら最近そんなワードを聞いたことがあるような。

「折宮遊真さん、ですね？ 本日は、ぜひとも取材を受けて頂けな
いかと思ひまして、こうして馳せ参じた所存です」

「なんで俺の名前……っていうか、取材なあ？」

「はい。実はわたくし、新聞記者でして」

そういうと、鴉天狗――射命丸文は、懷から一冊の新聞を取り出し、遊真に渡す。

「ふーん、『文々。新聞』ねえ……」

――『文々。新聞』？

これまたどこかで見たことがあるような。

遊真の脳みそが急激に回転しだす。

かたかたかた、ちーん。

——「……あのデバガメ天狗………潰すっ……」——

「ああ……デバガメ天狗って、あんたのことか……」

「ちょっ、いきなり失敬な！」

なにやら文が不満げに声を上げていたものの、あの時の恐怖を思い出している遊真はそんな事を気にする余裕はなかった。

「あのなあ、あんたのせいで色々大変だったんだぞ。主に俺の精神面が」

「んんっ、こほん！ いやはや、すみませんでした。実はあの記事を書いた後、人里であなたのことを知っている人がいないか調査を行いました。確かに誤解が生じていたようですねぇ」

人里で聞いたとなると、慧音さんか阿求さんのどちらかだろうか。遊真はそう推測した。

「つていうか、記事を書く前にそれをやれよ……」

「いやですねぇ。そんなことをして、他の天狗にスクープを横取りされたら困るじゃないですか」

いけしゃあしゃあとそう言ってのける彼女に、遊真は嘆息した。

——ああ、こいつ確信犯だ。

幻想郷らしいといえbraしいが、彼女もまた一癖も二癖もある性

格のようである。

「まあまあ、済んだことは仕方がないじゃないですか。清く正しい記事のため、インタビューさせてくださいよお」

「……あー、いや、俺は別にいいんだけど……」

「ありがとうございます！ では早速……」

「それはいいんだけどさ、まず……」

まず？ と首をひねる文のために、遊真は恐る恐る彼女の後ろを指差す。

「まず、あれは射命丸がなんとかしてくれ、うん」

疑問符を浮かべながら、文は後ろを振り返り——停止する。

「文あ……アンタ、よく私の前に顔出せたわねえ……！」

悪鬼羅刹が降臨していた。

「あ、あややや……」

流石の文も冷や汗をかきながら後ずさる。

助けを求め、縫るような目で遊真の方を見るが——

「そういえば魔理沙ー、この間さー」

「ほー、そんなことがねー」

既に安全な所へ避難済みであった。

彼も幻想郷での立ち回り方をすっかり身に着けているようである。

「いやー霊夢さん、少し落ち着かれては……」

「当然、覚悟はできてるわよねえ……？」

文の言葉にも聞く耳を持たず、霊夢は何枚もの御札を取り出す。
その光景を眺めながら、魔理沙は遊真に話しかけた。

「そういや、遊真はまだ『弾幕ごっこ』を見たことがないんだってな」

「ん？ ああ、話には聞いてたけどな」

『弾幕ごっこ』。

スペルカードルールとも呼ばれるそれは、幻想郷において、人間と妖怪が対等に戦うために作られた決闘方式である。

「霊夢は相当強いんだよな、それ」

「ああ。今のあいつは容赦無いだろうしな」

しっかり見ておくといいぜ、と言って、視線を元に戻す。

遊真も霊夢たちの方を見ると、既に戦いは始まりかけていた。

「ほうら、いくわよお！」

「わわっと、いきなりですねぇ！」

霊夢がばらまくように投げた御札が光を放ち、意思を持ったように文に殺到する。

誘導性のあるそれは簡単に避けられるものではないが、ぎりぎり

まで引き付けてから飛翔し、見事に振り切る。

目標を失った札は地面に当たり、ミサイルのように爆散した。

「そこっ！」

しかし、それを予測していたようにすぐさま追撃が放たれる。

空中の獲物を撃ち落とさんと発射されたのは、アミュレットと呼ばれる霊力弾だ。

徐々に拡散し、スピードを上げながら文を襲う。

「ならばっ！」

もちろん黙ってやられる文ではなく、押し寄せる弾幕に向かい取り出した扇を一振りする。

巻き起こした風で出来た弾幕が御札とぶつかり合い、相殺した。

一瞬の膠着。先に動いたのは文だった。

「ふっ！——」

「うおっ、早っ!？」

瞬間的に加速した文が霊夢の後ろに回り込む。

離れて見物していた遊真でさえ、あまりの速度にその姿を一瞬見失った。

がら空きの霊夢の背中に、文が突風のような一撃を放つ。

しかし、まるで見えているかのように、霊夢は背を向けたまま紙一重でそれを躲した。

振り向き際に反撃の札を放つ————が、遅い。

「まだまだっ！——」

文のスピードが上がる。

正に、疾風の如く。

広い空を縦横無尽に翔け巡りながら、その間にもさらに加速していく。

既に、遊真はそれを目で追うことが出来なかった。

霊夢はただそこに立ち尽くすのみ。

そのまま、目にも止まらぬ一撃が彼女を襲う——そう思われた時だった。

——！

「あやっ！？」

あらかじめ霊夢が背後に設置していた札の術式——結界術が発動した。

地雷のように発動したその結界は文を絡め捕り、たちまちにその動きを止めてしまう。

「甘いわよっ！」

すかさず霊夢が封魔針を放つ。

妖怪退治のために霊力が込められた針は見た目以上の鋭さを持ち、いかに文でも直撃すればひとたまりもない。

「くっ……！」

自身を捕らえる結界を破れず、苦悶の表情を浮かべる文。
決まった。遊真がそう思った瞬間だった。

——竜巻『天孫降臨の道しるべ』——

「っ……！」

「おっと」

「ぐおっ!？」

突如文を中心に巨大な竜巻が巻き起こり、霊夢を飲み込む。

危険を察知した魔理沙は遊真の襟首を掴むと、後ろへ飛んで余波から逃れた。

「てめっ、魔理沙! もっとやりようあるだろが！」

「いいから見ろよ、あれが『スペルカード』だぜ」

「はあっ!？ って、うおっ……」

思わず非難の声を上げた遊真だったが、魔理沙の視線の先を見て閉口する。

それは正に自然の暴力だった。

あらゆるものを飲み込まんとばかりに猛威を振るう大竜巻は、成長を続け、天高くまで伸びていく。

辺りの砂を巻き上げ、枯葉を喰らい、なおその勢いは留まることを知らない。

外の世界ならば、立派な災害。あるいは天災と呼ばれただろう。あまりの激しさに、飲み込まれた霊夢の姿も確認できなかった。

「おい、大丈夫なのかよ、あれ……」

「文も結構な実力者だからな。あれくらいはやるぜ」

心配する遊真とは対照に、魔理沙の態度は落ち着いたものだった。まるでこれから先何が起こるかを待っているかのように、ひたすらまっすぐに現場を見つめている。

「(何とか、戦況をひっくり返せたかしらね……)」

竜巻の中心では、文が冷静に状況を分析していた。

この『天孫降臨の道しるべ』は彼女が持つスぺルの中でも上位に位置するものであり、それゆえに自信のある一手である。

「(とは言え、あの巫女がこれくらいで終わるわけないし……)」

しかし、相手はあの『博麗霊夢』である。

幻想郷の守護者とも呼ばれる彼女の力は本物だ。

並みの者ではまともな勝負にすらならず、通常畏られる側の妖怪が逆に彼女を恐れているという有様である。

「(適当なところでとんずらしたいところだけど、さて……)」

もともと、こんなくだらないことで本気で戦えるような相手ではない。

取材の事は惜しいが、また日を置いて出直すべきだろう。
そう考えた文が、そのための策を練り始めた――その瞬間だった。

――！

「っ!？」

竜巻の中から針が撃ち出され、地面に突き刺さる。
一見、目測を誤った。もしくはでたらめに放たれた攻撃に見える。
しかし、文はそうは思わなかった。

「これ、は――!」

地面に刺さった四発の針は、綺麗な正方形を描いていた。
まるで竜巻を――文を四角く囲むように。

針に囲まれた地面が、眩しく光る――

――夢符『封魔陣』――

巨大な竜巻を、さらに巨大な光の柱が飲み込んだ。
天高くそびえ立つ結界は、気流の渦を瞬く間に食らいつくす。

己を誇示するかのように眩い光を放ちながら、やがてそれは収束
していく。

光が消え去った後にそこに立っていたのは、霊夢一人だけだった。

「……逃げたわね、あいつ」

苦々しく呟く霊夢だが、その両足はしっかりと地面を踏みしめており、ダメージを受けた様子はない。

「……って、霊夢。平気なのか!？」

「あんなの、流れに逆らわなければいいだけじゃない。すぐ目も慣れたし」

あっさりと言ってのける霊夢に遊真は呆然とする。

自慢の攻撃をこんな風に言われる文もたまったものではないだろう。

「これをなんとなくでやってのけるのが、霊夢の恐ろしいところなんだよな……」

魔理沙もさすがに呆れたようだった。

案外、彼女も幾度も辛酸を舐めさせられたことがあるのかもしれない。

「で、どうだ遊真。初めて『弹幕ごっこ』を見た感想は」
「もう、何も言えねえよ……」

遊真にとっては、あまりにでたらめな時間だった。

よほどの事では驚くまいと高を括っていた彼だったが、もはや溜

息すら出てこない。

仮に弾幕が撃てるようになって、こんな次元に自分が辿り着くことはないだろう。

むしろ頼まれても御免である。

「……ああそうだ、遊真さん」

「な、なんだ？」

若干身構えながら、遊真は訊き返す。

霊夢の強さを見せつけられた所為か、自然と体が及び腰になっていた。

「このへんの後片付け、お願いしますね」

見れば、竜巻のせいで燦燦たる有様である。

地面は抉れ、辺りには枯葉や枯枝が散乱している。

当然、遊真がこしらえた薪もあちこちに飛ばされていて、だれかさんの家の中を思い出させる光景だった。

——ああ、こんなオチか。

今回の一件で、霊夢への畏怖から、遊真がますます彼女に逆らえられなくなったのは言うまでもなく。

肩を落とす遊真の背中を、慰めるようにぽんと魔理沙が叩いた。

#5 常識は投げ捨てるもの（後書き）

主人公、一般人卒業の巻。別名厨二病回。

読むのにはあまり抵抗はないのですが、自分が書いてると結構くるものがあったり。

なんちゃって戦闘描写しか書けないので、バトルものになることはなさそうです。

#6 後悔は後でするもの

人間の里付近の空中。

多々良小傘^{たたらこがさ}は今日も獲物を探していた。

獲物、と言っても物騒な意味ではない。

彼女は一般的な危険な妖怪とは違い、人を食う妖怪ではないからだ。

誰からも拾ってもらえず忘れ去られ、それが年月を経て付喪神となったもの。

つまり、唐傘お化けと呼ばれる種族こそが小傘の正体である。

彼女たちにとっては人間を驚かせる事こそが生きがいであり、存在意義でもある。

小傘が現在差している傘は彼女が付喪神となる前の姿であり、人間を驚かす場合にもこれを使用する。

濃い紫色、ぎょろりと覗く大きな一つ目、口のような模様の場所からは長い舌がだらんと垂れ下がっている。

なるほど不気味な傘である。

こんな妖怪が外の世界に現れれば確かに大騒ぎとなるだろう。

しかし悲しいかな、ここは幻想郷である。

人の姿をした者が大勢空を飛びまわり、毎日のように弾幕ごっこが繰り広げられる世界。

他にも、火を出す者、電撃を出すもの、時間を止める者、死んでも死なない者があちらこちらに存在する世界である。

そんな濃い者だらけの幻想郷において、小傘はあまりにもちっばけで、無害な妖怪だった。

当然、彼女如きに驚く人間はどんどん減っていく。

最近では、小さな子供を驚かそうとしても、逆にきゃっきやと笑って喜ばれてしまう始末である。

それでも彼女は諦めず空に行く。

それが唐傘お化けであり、多々良小傘であるからだ。

さて、しばらく時間が経ち、彼女はようやく本日の獲物を見つけた。

人里への方角へ、一人歩く青年。

妖怪を警戒しているのか、過剰なほどに周囲を見渡していた。

小傘はほくそ笑みながら接近する。

おどおどしながら辺りを見る青年だったが、空中にいる彼女に気付く様子はない。

青年の頭上に回りこんだ小傘は、一気に落下し、青年の目の前へと傘を突き出す！

「うらめし」「うおおおおお！！」「うひゃう！？」

小傘の脳内では、自分に驚いた青年が無様に腰を抜かして座り込む未来が描かれていたのだが、現実はそうではなかった。

傘を視認した瞬間、青年は正に必死という形相で勇ましい声を張

り上げながら走りだしたのである。

逆に驚いた小傘が地面に座り込み、青年は凄まじいスピードで走り続け、間もなくその姿は見えなくなった。

「……………えー、と……………」

困惑した様子の小傘が一人、その場に取り残されていた。

□ ■ □ ■ □ ■

「危なかった……………すげえ危なかった……………」

無事里へと辿り着いた青年——折宮遊真は、息を切らしながら自分が走ってきた道を見返した。

今日初めて、彼は一人で人間の里へとやってきたのである。

先日、やはり弾幕は出せないながらも訓練を続け、無事魔理沙から太鼓判を押された。

曰く、「言葉がわからない妖怪ぐらいからなら逃げ仰せられるし、そうじゃない妖怪なら死なないくらいにはなった」らしい。

今はまだ空を飛ぶ術は学んでいないが、これも機会があったら習うつもりだ。

そんなわけで、念願の一人での道中への挑戦だったのだが、いくら大丈夫と言われても不安になってしまうのが人間である。

いつ妖怪に会うかひやひやしながら歩き続け、なんとか里近辺まで無事に辿り着いたのだが、そこで先ほどの事件が起きた。

突然視界に現れた十こは人里の外に妖怪、危険！

遊真が瞬時に導き出した解答である。

反射的に魔力を体に漲らせ、全力疾走。

有りもしない命の危機を感じながら、無事？逃げ切ったのだった。

息が整うのを待ってから、再び目的地に向け、遊真は歩き出した。



「ふむ、仕事、か」

「はい、なんとかありませんかね？」

遊真が辿り着いたのは、慧音の開く寺子屋だった。

今日人里に来たのは、彼女に働き先を紹介してもらえないかと考えたためである。

「しかし、どうしてだ？ 巫女のところは裕福ではないが、一人抱えたくらいで生活に困るほどではないだろう」

「まあそうですね、それでも何もしないのは決まりが悪いじゃない

いですか。あつて困るものじゃありませんし」

慧音の言うとおり、遊真が働いたりしなくても、いきなり彼がつまみ出されるようなことはないだろう。

しかし、だからといって何もしないでいいとは彼は思わなかった。毎日の家事手伝いも、要領を覚えてしまえばすぐに終わり、手持無沙汰な時間が残ることも少なくなかった。

「別に家賃みたいな形じゃなくても、恩を返すためには何かしら先立つものは必要ですし、霊夢以外にも世話になった人や、これから迷惑をかける人もいるかもしれないじゃないですか」

「なるほどな……そういうことなら、なんとかしなくてはな」

遊真の言葉を聞いた慧音は、納得した様子でしばし考え、そして言った。

「わかった。少し時間をくれないか。知人を少し当たってみよう」
「本当ですか!？」

喜ぶ遊真を見ながら、慧音は立ち上がる。

「君のその姿勢は感心できるものだ。なに、当てはあるし、おそろく大丈夫だろう」

ありがとうございます、と頭を下げる遊真を、慧音は微笑ましく見つめていた。



慧音に札を言って別れた後。
折角だから里の中を歩き回ってみようと思い、遊真がしばし散策をしていた時だった。

「……なんだこれ？」

人目を避けるように、ひっそりとそれは落ちていた。
中心の透き通ったところから淡い光を放っていて、なにやらランタンのような形状ではあるが、どうやら火が点いているわけではなさそうだ。

落し物か、と辺りを見渡してみるが、人通りは少なく、落とし主らしき人が現れる気配も無い。

後でもう一度慧音さんのところに行って訊いてみるか、と考えた遊真は、ひとまずそれを持参した鞆の中に収め、また足を進めた。

しばらく経ち、あらかた里を見て回り終えた時である。
突如遊真を呼び止める声がかかった。

「その君、ちょっといいだろうか」

振り向くと、そこにいたのは遊真よりも背の低い少女だった。
なにやら細長い棒のようなものを二本、その手に持っている。
しかしそれよりも目立っていたのは、彼女の頭に、動物のような大きな丸い耳がついていたことである。

妖怪か、と内心警戒を強めながら、遊真は訊き返す。

「何か俺に用か？」

「ああ、危害を加えるつもりは無いよ。この辺りで、ランプのような形をした道具を見なかったかい？」

その言葉を聞いた遊真は、すぐに先ほど自分が拾ったものを思い出した。

鞆を開き、取り出して見せる。

「このことか？」

「ああ、それだ。済まなかったね、それは私の主人の落し物なんだ。返してもらえるとありがたいのだけど」

遊真としても、用途の分からないものを何時までも持っているつもりもない。

当然、それを承諾した。

「ああ、わかったよ。ほら」

「ありがとう。素直に返してもらえる人に拾われていてよかったよ」

妙に実感のこもった言葉を言いつつも、少女は安堵の表情を浮かべる。

遊真の差し出したそれを、少女の小さな手が受取ろうとしたそのときだった。

（がつんっ！）

「いだっ!?!」

「うあっ!?!」

突然遊真の側頭部に衝撃が入った。

目の前の少女の仕業かと思ったが、彼女も同じように頭を抱えている所からするとそうではないらしい。

「一体何が……あ」

「あ」

『ああー!?!』

気付けば、遊真が持っていたはずの『道具』が無くなっているのである。

当然、少女の手に渡った様子もない。

どこかに落としたのかときよろきよると辺りを見回すが、何処にもその姿は見当たらなかった。

「あーはっはっは！」

困惑する二人の頭上から、小悪党のような笑い声が飛来する。

「探し物はこれかしらー？」

幼い子供の姿をした者が三人、そこに浮いていた。

しかし、ただの幼児ではないことは、彼女達の背中ではたばたと羽ばたく透き通った羽が証明している。

真ん中の勝ち誇った笑みを浮かべている赤い服の手には、さっき遊真が少女に返そうとした『それ』が収まっていた。

「……妖精って奴か？」

それが存在することは既に聞いていたが、遊真が妖精を目にする

のは初めてだった。

幻想郷に居るだいたいの妖精は、その見た目と同じく、幼稚で悪戯好きな性格をしている。

つまりこの子たちも、そういうことなのだろう。

「……悪いが、妖精如きの悪戯に付き合っている暇はないのだよ。さっさと『宝塔』を返してもらおうか」

動物耳の少女の気配が鋭くなる。

彼女にとって、その道具——『宝塔』というらしいそれは、それほど大事な物なのだろう。

「……とりあえず、あれを取り返した方がいいか」
「？ 君、何を……」

自分の中で静かに結論を出した遊真は、少女の問いかけに答えず、地を蹴った。

幻想郷に来る前の彼ならば、まったく意味のないであろう行為。

しかし、今の彼はそうではない。

「え？ ちょっと——」

霊夢や魔理沙の『飛翔』とは違い、彼が今できるのは『跳躍』のみである。

だが、その一度の『跳躍』で、はるか頭上の妖精たちの元へ、遊真は辿りついてみせた。

前口上も無しの、突然の行為。

しかも、妖精たちは遊真のことをただの人間だと思い警戒すらし

ていなかった。

そういった理由もあり、遊真の手は寸分の狂いもなく中心の妖精を捕らえた。

「うわっ、ちよっ、放しなさいよヘンタイ！」

「誰が変態だっ！ くそっ、暴れんな！」

妖精も必死に暴れるが、遊真も同じように必死である。
逃れようとする妖精を何とか抑え込む。

「おっと動くなよお前ら！ こいつがどうなってもいいのか！」

「いや、悪いが、今の君は相当犯罪者臭いぞ……」

遊真の力技に少女も気を削がれたようで、呆れたような顔をしていた。

三妖精の一人である、青色の服の妖精——スターサファイアが、慌てて声を上げる。

「サニー、能力！ 能力！」

「あっ、そっか！」

『サニー』と呼ばれた、遊真が今捕まえている妖精は、仲間の言葉聞き、はっとしたように目を閉じる。

すると、妖精たちの姿がたちまち薄れていく。

「つて、うわっ!？」

それに驚いた遊真の隙を付き、赤い服の妖精——サニーミルクは、彼の拘束から脱出する。

そのまま彼女の体は透明になっていき、最後には完全に見えなくなってしまうた。

「……透明になれるのか？ そんなのアリかよ……」

「そういう能力なのだろう。だが……」

途方に暮れる遊真であったが、少女はそうではなかった。

自信満々といった表情で、彼女は持っていた二本の棒を構える。

「この私にかくれんぼで勝負しようとは、いい度胸じゃないか」

少女の集中に答えるように、彼女の胸にある振り子——ペンデュラムが浮き上がる。

「……ひょっとして、ダウジングか？」

「おや、なかなか慧眼だね」

ダウジング。

振り子や金属製の棒を使い、地下にある水脈や鉱脈を見つけ出す技術のことである。

言われてみれば彼女の持つ棒は、一般的にダウジングをする際に使用するL字型の棒に見えないことも無い。

遊真の背丈ほどもある大きさは明らかに異常だが。

「私の『探し物を探し当てる程度の能力』にかかれば、姿が見えない事など些細な事なのだよ。こんな風につ！」

そういうと少女は、妖力で作り出された一発の弾丸を放つ。

それは、何もない空間へと飛んで行ったように見えたが——

「きゃうっ!？」

背後でこちらの様子を窺っていた三妖精に、しっかりと命中した。ダメージを受けた衝撃で、サニーミルクの能力が解除され、彼女たちの姿が露わとなる。

「……お見事」

「さあ、いい加減観念してもらおうかな」
「う、うぎぎ……」

徐々に距離を詰める少女と、後ずさりする三妖精。
ようやく決着か、と思われた時だった。

「……きゃっ!？」

「わっ!？」

「わわっ!？」

黄色い服の妖精——ルナチャイルドが、地面の窪みに足を引っ掛け、盛大に転ぶ。

その際に隣にいたスターファイアを巻き込み、さらにそれがサニーミルクを巻き込んだ。

結果、サニーが持っていた『宝塔』が宙を舞った。

『あっ』

ゆっくりと時間が流れた気がした。

『宝塔』が弧を描き、何もない地面へと吸い込まれていく。
思わず駆け出そうとした遊真だったが、その距離はあまりにも遠

かった。

『宝塔』が地面に落ち――光が破裂した。

『きゃー!?!』

「うわっ、危なっ!?!」

放たれた光は地面を抉り、土を焼く。

反射的に後ろに跳んだ遊真にも光線が襲い掛かり、顔の横すれすれを抜けていく。

何かが焦げた臭いがした気がした。

「おいっ、なんだよあれ!?!」

「お、落ちた衝撃で宝塔の力が暴走したのか? 中に封じられた毘沙門天の力が……」

「そんな危ないモン落としてんじゃねえー!?!」

そんなことを言ってる間にも、宝塔はレーザーを放ち続ける。

宝塔と壁に挟まれる形となった三妖精達には逃げ場がない。

あまりの激しさに遊真も少女も近づくことが出来ず、自分の身を守るので精一杯だった。

「きゃー! きゃー!」

「お、押さないでよ! きゃー!」

「シャレになってねえぞこれ……!」

このままでは危険だ。

何とかして宝塔の暴走を止めるか、全員を安全な所に避難させる
かしなければ。

「きゃっ……！」

「っ！　くそっ！」

レーザーが妖精の一人を掠めるのを見て、遊真は覚悟を決めた。

「なあ、あの宝塔って奴、結構丈夫に出来てる？」

「まあ、そうそう壊れるようなモノではないが……どうする気だ？」

「蹴っ飛ばして、どっかにやる」

「……君も中々いい性格をしているよ」

少女は肩を竦めるが、それでも遊真を止めはしないようだった。

「わかった、何とか援護を試みよう。なに、ご主人には内緒にし
ておくさ。思いつきやるといい」

「いいのか？」

「元はと言えばアレを何度も無くすご主人が悪い。それに、君が怪
我をしても私は知らないよ？」

「……上等さ」

光線を充分避けることの出来る距離で様子を見る。

目の前に展開される弾幕を凝視し、こちらへの密度が薄くなった
一瞬を狙う。

宝塔が放つ激しい光は未だに和らぐことは無いが、遊真は周りの
音が段々小さくなっていくのを感じた。

「……………今だっ！」

「っ！」

少女が声を上げたのと、遊真が第一歩を踏み出したのは同時だった。

正面から来た光線を姿勢を低くすることで躲し、斜め前方から来る弾幕を逆側に踏み出すことで掻い潜る。

とにかく、足を止めてはいけない。

遊真の本能がそう判断していた。

「くうっ……！」

宝塔に近づけば近づくほど、その弾幕は一層強固なものになっていく。

思わず遊真は躊躇しかける。しかし。

――！

――！

遊真の背後から飛んできた弾幕が宝塔の弾幕とぶつかり合い、相殺する。

それによって生じたスペースに反射的に飛び込んだ。

「よしっ……！」

いける。

動物耳の少女の援護は的確だった。
これなら不可能ではない。

そう思った遊真は決して油断していた訳ではない。
しかし、思わず気が急いってしまったということも否定出来なかった。

———！

宝塔まで残り数歩の所。

放たれた光線は、遊真の足元の地面を薙ぎ払った。

「うわっ……！？」

バランスが、崩れる。

足を止めてしまったただけではなく、体制が傾き、地面にその身が
投げ出される。

視界が、真っ白な光に染まる。

「くっそおおおお！！」

誰かの声が聞こえた気がした。
せめてもの足掻きにと、目いっぱい地を蹴り、手を宝塔に伸ばす。
体が、燃え上がるような感覚がした。

「……………」

この沈黙は、一体誰のものであっただろうか。

「……い、生きてる？」

自分の体の感覚がしっかりと感じられることを確かめた遊真は、
恐る恐る目を開けた。

その手の中には、既に沈黙している宝塔の姿があった。

「……止まった、のか？ 何にせよ、危機一髪だったね」

いつの間にか近づいてきていた動物耳の少女が、宝塔を拾い上げた。
た。

辺り一面、焼け焦げた地面が広がっている。

「なあ、何があったんだ…………？」

遊真の体に怪我らしい怪我はない。

そのことに安心しつつも、困惑した様子で遊真は訊いた。

「何が、と言われてもね。君がレーザーに当たりそうになった瞬間、宝塔の暴走が止んだとしか言いようがないな」

どうやらエネルギー切れのようだ。と、ぷらぷらと遊真の目の前で宝塔を揺らして見せる。

宝塔の光は最初よりもずっと暗くなっていた。

はあ、と、遊真は地面に座り込む。

「何か、どっと疲れた……」

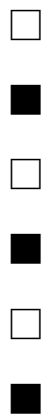
比喩でも何でもなく、体中が重くなった感じがした。倦怠感に全身が包まれていて、しばらく立ち上がれそうにない。

「ははは。怪我がなかったのだから十全さ。君たちも、これに懲りたらしばらく悪戯は控えるといい」

少女がそう言うのと、物陰に隠れていた妖精達が遊真の元へとやってくる。

「あの、その……ごめんなさい。ありがとう」

随分しおらしくなった彼女達の態度に、遊真はなんとか、笑顔を作ってみせた。



「自己紹介が遅れたね。私はナズーリンという。毘沙門天の使いの者だ」

事態が収束した後、動物耳の少女はそう名乗った。

「……毘沙門天ってのは、そんなにうっかりもんなのか？」

「いや、お恥ずかしいかぎりだよ。やるときはきちんとしてくれるのだから……」

そう言うナズーリンの姿はどこか哀愁漂うもので、どこことなく遊真は親近感を覚えたりしていた。

「あんたも苦勞してるんだな……」

「それはお互い様さ。博麗神社の居候君」
「なんだ、知ってたのか」

さっき名前を聞いて思い出したのだよ、と、ナズーリンはウィンクして見せる。

「今日はもう遅いし、また会う機会があったら、その時は何かお礼をしようじゃないか」

「そっか、楽しみにしてるよ」

「うん、それでは」

そう言って、遊真とナズーリンは別れた。
彼女も頻繁に里にまで来ているそうで、再会する日はそう遠くはないのではないかと遊真は思った。

里の入口で、遊真は一度大きく背伸びをした。

体の疲労感も、そろそろ和らいできている。
もう少しで、日が傾いてくるであろう時刻であった。

「……帰り道もあるんだよなあ」

行きの道でも相当神経を使ったのだから、当然気も重くなる。
しかし、一番大変なのはこのまま日が暮れてしまうことだ。
夜とはつまり、妖怪の時間であり、道中の危険性も上がる。

自分に一つ喝を入れ、遊真は神社へと歩き出した。

#6 後悔は後でするもの（後書き）

思いつきで話を挿入した結果がこれだよ！
これからどんどん不定期になっていくと思います

#7 石橋なんぞ叩き壊せ(前書き)

今回短いです

#7 石橋なんぞ叩き壊せ

「……まあ、こんなもんか」

手に提げた布製の鞆の中身を見ながら、遊真は一人呟いた。

その中身は、大根や白菜などの野菜に、鶏卵。

他にも一般的な家庭で使われる食材がぎっしりと入っている。

本日、掃除を終え、一人休憩していた遊真は霊夢にお使いを言い渡された。

当然、二つ返事でそれを引き受け、いざ行かんと意気揚揚に里へと出向いてきた彼であったのだが。

「いきなりこれだけ値切ってこい、ていうのはハードル高すぎるよなあ……」

渡されたメモとにらめっこしながら、誰に聞かせるのでもなく愚痴る。

メモに書かれた品数はそれなりに多く、その割には支給された金額は明らかに少ない。

初めからある程度値切らないと全ての品が買えないようになっていたのだ。

商人との交渉という事柄は、人生経験の少ない遊真にとって難易度の高い分野である。

おまけに、相手が気心知れた仲ならまだいいものの、普段博麗神

社に住む彼からすれば、一部の人を除き、里の人々と交流する機会は未だほとんど無かった。

それでも遊真にとって救いだったのは、射命丸文の例の新聞によって彼の知名度自体はそれなりにあったこと。

またそういった人たちは、彼が霊夢の所に居候していると知ると、何も言わずに交渉に応じてくれることであった。

霊夢恐るべし。

ともかく、何とか一通りの買い物を終え。

折角だから慧音や阿求のところに顔でも出しておこうか、と遊真が考えていた時だった。

『泥棒だあ！ 捕まえてくれえー！』

「……泥棒？」

遠くから聞こえてきた不穏な言葉に、遊真は眉を顰める。

守護者である慧音の尽力もあり、人里で物騒な事件が起ころことは珍しいことである。

「あっちは……魚屋の方かな」

声が聞こえてきた方角はしっかりと掴めている。

鞆をしっかりと抱え直すと、周囲の喧騒を振り切るように、遊真は軽快に走りだした。



「……そういうことね……」

犯人はあっさりと捕まった。

強化された身体能力で素早く現場に駆け付けた遊真は、魚屋の親父の指差す方へと疾走。

程なくして路地裏へと逃げ込む犯人を目撃し、そのまま行き止まりまで追いかけて、確保。

あとはこいつを魚屋に引き渡して終了、の筈なのだが。

「猫かよ……」

捕まえた犯人——子猫を恨めし気に見つめながら、遊真は溜息を吐く。

首を掴まれた猫は手足をぶらんと垂れ下げながらも、その口に咥えた魚を放そうとはせず、じいっと遊真を見つめ返してくる。

首輪が無いことからすると、どうやらノラ猫のようだった。

「……まあ、いいか」

野生の生き物をあまり甘やかしてはいけない。

そう思いつつも、どうにも遊真はこの猫を魚屋に引き渡す気には

なれなかった。

つぶらな瞳でこちらの顔を直視されると、何やらこちらが悪いことをしたような気がしてくる。

自分の勝手な一人合点ではあるものの、勘違いさせるような言葉を言った魚屋に対するやつ当たりのような意味もあったかもしれない。

どうせもう売り物にはならないだろうし、と、魚を啜えさせたまま猫を解放する。

「ほどほどにしとけよー？」

家屋の隙間へと入り込んでいく猫に声をかけて、遊真は振り返る。狭い路地裏には、遊真以外の人間はいなかった、筈なのだが。

そこに一人の少女が立っていた。

銀色に柵引く髪を肩口で真っ直ぐと切り揃えた、生真面目そうな少女である。

彼女の横には白い人魂のようなものがふわふわと浮いていて、傍から見ても明らかに異質な雰囲気——なのだが。

「……は？」

呆けた声を出す遊真の視線は、その少女が手に持っている物に注がれていた。

差し込む陽光を反射し、ぎらりと光る鋼の色。

鋭く伸びるその先端は、真っ直ぐに遊真の体へと向けられている。

「……えー、と……」

背筋を冷や汗が流れ落ちるのを感じた。

——なんだこれ、どういう状況？

幻想郷はとにかくとんでもないところである。それは遊真も重々承知だった。

人が空を飛ぶし、妖怪が出るし、妖精は悪戯するし、巫女はおっかないし。

ただ、それでも。

見た目幼い少女に、日本刀を突きつけられるとはまったく考えていなかった。

「——泥棒、ですか」

少女が口を開く。

遊真よりもずっと小さな体なのに、そこから放たれている気配は刃のように鋭かった。

思わず一步後ずさる遊真。

しかし、彼の背にあるのは行き止まりである。

逃げ場は、なかった。

「ちょ、おい、待て――」

「問答、無用――！！」

一閃。

瞬きをすれば見逃してしまいそうな光景だった。

少女の体が一瞬ぶれた瞬間、銀色の直線が遊真の頭部を駆け抜けた。

何かが碎けるような音がした。

なす術もなく、遊真は仰向けに倒れる。

「――ふう」

神速の如き一撃を放った少女は、一息を吐き、慣れた所作で刀を腰に帯びた鞘に収める。

表情が綻んでいるところを見ると、彼女にとっても会心の一撃だったらしい。

先ほどまでの刃物のような雰囲気はどこへやら、年頃の少女らしい笑みを浮かべていた、のだが。

「~~~~っ！ 痛ってえな、くそっ！」

「っ！ なっ！？」

背後から聞こえてきた声に、驚愕と共に振り返る。

「って、うわっ！ 中身ぐちゃぐちゃじゃねえか！」

遊真の鞆の中身から、真っ二つにへし折れた大根や、その他の野菜の残骸のようなものがこぼれ出る。

「――防がれた！？」

少女が放った一撃は、確実に遊真の頭部を捉え、たちまち意識を刈り取ってしまう筈だった。

しかし、少女が駆け抜けるその瞬間。

反射的に遊真は手に持った鞆で頭を庇い、ダメージを抑えることに成功したのだ。

少女の只ならぬ気配に警戒した遊真が、咄嗟に『身体強化』をしたことにより出来た所業である。

日ごろの訓練の賜物だった。

「（にしても、なんなんだあいつは！？）」

しかし、動揺しているのは遊真も同じである。

今彼が無事でいるということは、恐らく先ほどの一撃は峰打ちだったのだろう。

そうでなければ、買い物鞆程度で防御できる筈もなく、よくて大怪我、悪くて死んでいた。

――それなら、俺を殺そうとしている訳ではない？

だが、そもそもこうやって狙われる理由なんて——ああ、くそっ！
ともかく、座り込んだままではまずいと思い立ち上がる。

再び、両者は相対する。

一度攻撃と防御のやりとりがあったせいか、お互いの表情はより真剣なものとなっていた。

少女が移動したことにより、位置関係は先ほどの真逆である。
遊真の背にあるのは行き止まりではなく一本の道。

逃げ道はできた。

しかし、少しでも視線を逸らせば、その隙を少女は見逃さないだろう。

先ほどの一撃にしても、防御に成功したのは僥倖に近い。

だいたい、普段遊真がしているのは基礎体力を鍛えることや魔力操作をスムーズにするための訓練であり、実際に戦うための心得などあるはずもないのだ。

実力差は明らかで、正面から戦っても勝てる筈がない。

今考えるべきなのは、どうやってこの場から無事に逃げるかだ。

——アレが使えるか？

遊真の脳裏に一つを選択肢が浮かぶ。

「（元より、俺の手札はアレしかない。問題は、いつ、どのように使うか……）」

思考の海に潜っているうちにも、少女の放つ気は研ぎ澄まされていく。

いつまたあの一閃が襲ってきてもおかしくは無い。

——ええい、ままよっ！

一度考察を打ち切り、こちらも構える。

きちんとした格闘技の型など知らないが、なにもしないよりはマシだと思ったかった。

互いに静止して動かない。いや、動けない。

刹那の瞬きすら見逃さぬよう、五感すべてを奮い立たす。

きっかけとなるその瞬間を、ただひたすら待った。

「……………」
「……………」

風が、吹いた気がした。

「——っ！」
「——っ！」

少女が小さな体を更に縮め、バネのように飛びかかろうとする！
それに合わせ遊真が左足を力強く踏み込み、右手の一撃に全てを

賭ける！

勝負は、一瞬――

――パシヤツ。

「……あん？」

「……え？」

突然辺りに響いた場にそぐわない軽い音に、二人は目を丸くした。そして間もなく、それがカメラのシャッター音であることに気づき、同時に空を見上げる。

「ふうむ、『冥界の庭師、人里で辻斬り疑惑！』といったところで
しょうか」

「……射命丸？」

そこにいたのは、『文々。新聞』の編者であり、鴉天狗の射命丸文である。

背の翼で遊真たちの頭上を飛ばたきながら、手にした手帳に羽ペンで何事か書き込んでいるようだった。

「いやはや、遊真さんが里に居ると聞きました、何とか取材を受けて頂けないかと探していたのですが、これは予想外のネタが手に入りましたね」

「いや、お前、いつからそこに……」

すっかり氣勢を削がれてしまった遊真が冷や汗混じりに問いただ
している、ようやく我に戻ったらしい少女が声を上げる。

「ちょ、なんですかそれは！ 私はまだ盗人を懲らしめようとした
だけで……！」

「……おい、誰が盗人だ、誰が」

「………えっ？ あれ？」

遊真の送る白い目に、あたふたと慌てだす少女。

「……えっと、これって、もしかして……」

「もしかしくなくても、勘違い、という奴ですかねえ」

へらへらと楽しそうに笑う文と、混乱している様子の少女を横目
にしながら。

遊真は、重い重い溜息を吐いた。

#8 凜として咲く桜の如く? (前書き)

サブタイトルを付けたことを後悔しだした今日この頃
毎度のことながら特に意味はありません

#8 凜として咲く桜の如く？

結局、その後に駆け付けた魚屋の店主の証言もあり、遊真の潔白は直ちに証明される事となった。

遊真としても、自身への誤解が解けた安心はある。

しかしそれ以上に、問答無用に叩き伏せられた事への不満が大きかった。

普段から元々周りにあまり強く出られない性分の遊真ではあるが、その分普段から色々と鬱憤を溜めこんでいるのもまた事実であり、少しくらい文句を言っても罰は当たらないだろうと思っていたのだが――

「本っ当に、申し訳ありませんでした！」

地面に膝を付き、手で体を支え、深々と頭を下げる少女。
見事なまでの土下座である。

きちんと正されたその姿勢からは、彼女があるだけの誠意を込めていることがしっかりと伝わってくる。

なるほど確かに、謝罪するにあたっては正しい事なのかもしれないが。

問題は、ここが活気溢れる往来の真っ只中だということである。

周囲から突き刺さる、視線、視線、視線、視線。

それもそのはずである。

傍から見れば、年若い少女が恥ずかしげもなく土下座を敢行し、その前に見知らぬ男が踏ん反り返って立っている（ように見える）のである。

「……おい、射命丸。カメラを構えるな。叩き割るぞ」

「あやや、これは失敬」

もはや溜息すら出てこない。

まあ恐らく、彼女も狙ってやっているわけではないのだろうが。というか、もしこれが意図されているものだったとしたら、本格的に遊真は幻想郷に絶望しなければならない。

「……とにかく、頭を上げてくれ。後生だから」

「は、はあ……」

不思議そうに顔を上げる少女を見て、遊真は確信する。
こいつ、何も分かってねえ。

とはいえ、流石にこの状況でさらに彼女に説教をする度胸は遊真には無かった。

「まあ、誤解が解けたならもう何も言う事はないよ」

「す、すいません。何かお詫びが出来ればいいのですが……」

「いや、いいんだ。俺はもう帰るから……」

今は何より、さっさと事態を切り上げるに尽きる。
やたら神経をすり減らしたし、もう今日は帰ってゆっくりしよう。

そう思っていたの、だが。

「ときに遊真さん。あそこで無残な姿になっている鞆はあなたの物では？」

「……………」

横から口を挟んだ文の言葉により、無視できない現実を突きつけられた。

—————

「……………しかし、見れば見るほどひどいなこれ」

鞆を拾い上げて中身を覗きながら、思わずぼやいた。
卵は割れ、豆腐は潰れ、碎けた野菜は泥塗れである。
あまりにも食欲が削がれる惨状に、遊真と文は顔を見合わせた。

「なあ、射命丸。これ、霊夢に見せたらどうなると思う？」
「……………」

無言で目を逸らされた。

——あれ、なんだろう。目の前がぼやけて見えない。

「あの、どうして霊夢さんの名前が……？」

「……俺は博麗神社に居候していて、これは霊夢の金で買ったということだ」

「……………」

戸惑い気味に訪ねてきた少女も、遊真の言葉を聞いて現状を把握したのか、その顔を青くする。

ここでも霊夢の名前は効果絶大だった。

「残ったお金で、何とか買い直すことはできないのですか？」

「考えても見ろよ、霊夢がそんな余分な金を持たせる訳ないだろ……」

そもそも最初の時点でギリギリの計算だったのである。
残金はほぼ無しと言ってよかった。

「……………」

「……え、ええっ、と……」

遊真と文の視線が少女へと集まる。

急に注目を浴びた彼女は慌てたように視線を逸らしたが、

「も、申し訳ありません。今は持ち合わせが……」

最後の希望が打ち砕かれ、遊真は深く肩を落とした。
なんだか今日はこんなばっかである。

「ま、まあ過ぎたことは仕方がないじゃないですか。きっといいことありますよ」

「お前、他人事だからってなあ……」

乾いた笑いをする文を、遊真は恨みがましく見つめる。

「いやいや、大丈夫ですよ。遊真さん、猫を見逃してあげてたじゃないですか。善行の後には良いことが起こるものだとか閻魔様もおっしゃっていました」

「……待て。お前、そこから見てたのか？」

「……あ」

口を滑らせた文の言葉を遊真は聞き逃さなかった。
しまったという顔をする文を見て、疑問は確信に変わる。

「つまりお前、もっと早く止めに入ることもできたんじゃないか！」
「あはは、しょうがないじゃないですか。記者として、あんなに面白そうな事態を見逃すわけがないですよー」

「おーけー、そこに直れデバガメ野郎！」

遊真が力を込めた右手を振りかぶるも、ひょいっと軽く避けてしまう文。

何としても目の前のダメマスコミに制裁を加えるべく、遊真が追撃を仕掛けようとした時だった。

「あ、あの！ ちょっといいですか？」

傍にいた少女が、遠慮がちに声を上げた。



階段の上り下りという運動は、その見た目よりも数段体力を消費するものだ。

一見地味な運動に見えるが、足にかかる負担は非常に大きく、一流のスポーツ選手でもトレーニングとして取り入れることが多々ある。

もちろん、段の数が増えれば増えるほど、蓄積される疲労に精神的な疲れも相まって、苦労は飛躍的に大きくなる。

また、普段あまり意識されることはないが、階段というものは予想以上に危険なものである。

その構造から、一度転んで落下した場合その勢いを止めるのは容易ではないし、直角に折れた部分に体を強く打ちつけるとまず間違はなく怪我をする。

万が一、頭などの急所を角に強く打ちつけた場合、それがそのまま死因となることも珍しくないのだ。

つまり、何が言いたいかというと。

「つまらん意地なんて張るんじゃないかった……」

現在進行形で長い長い石段を上っている遊真は、激しく後悔していた。

彼の上る石段は無骨な様相で、傾斜も急である。

そして何より問題なのは、上り始めて既に十数分は過ぎたというのに、一向にその終端が見えてこないことだった。

息を切らしながら一步一步を踏みしめる彼の顔を横を、人の頭く
らいの大きさの白い塊がふよふよと通り過ぎる。

もはや遊真にとっては慣れてしまった光景だった。

ここは『冥界』。

先ほどの白い塊の正体は、人の体から抜け出した魂——いわゆる、
『幽霊』というやつである。

この『冥界』は、そもそも最初は幻想郷からは結界により隔てら
れた場所にあり、そうそう行き来することはできなかったらしい。
しかし、とある『異変』の際、一度結界が解かれ、『なぜか』そ
の後も術者に張り直されず放置されたことにより、こうして徒歩で
も冥界に入ることが出来るようになったそうだ。

ちなみに、『なぜか』の部分については、一応霊夢に聞いてはみ
たのだが、

——『あいつ』の考えていることなんて、分かろうとする方が時
間の無駄よ——

と、にべもなく話を切り上げられてしまった。
遊真も追及しない方がよいだろうと判断し、結局理由は分からず
仕舞いである。

「——お？」

えっちらおっちらと歩を進めながら、修験者の如き心境に陥って

いた遊真の目の前に、一つの霊魂がやってきた。

その霊魂は、遊真の体の周りをくるくると回ると、少し前方の位置に停止する。

遊真が一步步くと、その分だけ霊魂も進み、もう一步步けばまた進む。

「案内ってことか？」

その眩きに反応したのか、霊魂はまるで頷くような仕草を見せる。どうやら言葉は伝わるらしい。

案内も何も、この階段は長い一本道であり、迷うような要素は少しも無い。

しかし、何の頼りもなしに一人黙々と歩き続けていた遊真にとっては、心が温かくなるような安心を覚えた。

「……よっしゃ、行くか！」

自身に気合いを入れる意味でも、一つ大きな声を出してから。先導する霊魂を追いかけるべく、遊真はペースを上げる。

やがて、まるで永遠のように感じられた階段の先端に、拍子抜けするほどあっさりと変化が訪れた。

その正体が門であることに気付くと、遊真の足取りは一層軽くなる。

「もう、ゴールしてもいいよねっ……っとお！」

一度終わりが見えてくれば精神的にも余裕が出てきて、そのまま

の勢いで、遊真は門を通り抜けた。

「……あー、しんど……」

膝に手について体を支えながら、呼吸を整える。

——こんなに疲れたのは、高校のときのマラソン大会以来……あれ？ 中学だっけ？ どうだったかな……

「……すっかりしないんだよなあ、もう慣れたけどさ……」

こういったところにも、記憶障害の弊害が出てくる。

断片的に、自分が何をやったのか、どんな思い出なのかはおおよそ思い出せるのだが、詳しい時系列やら何やらについてはなかなかはっきりとしない。

ひとまず、目先の出来ることに焦点を絞って、最近は記憶のことはあまり意識しないようにしていた。

しかし、改めて考えてみれば、明らかに何かおかしいような気がする。

医学に関しては門外漢の遊真であるが、どうにも胸の中のもやもやが晴れない。

——そういえば、幻想郷にも医者くらいいるのではないだろうか。
今度霊夢に聞いてみるか？

「……って、おっと」

思考に没頭していた遊真の視界の端に、先ほどから一緒にいた靈魂の姿がちらつく。

こちらをじっと見つめている……かどろかはよくわからないのだが、心なしかその姿は、突然黙りこくった遊真を心配しているかのようにも見えた。

「……あー、ごめんな。大丈夫だよ」

誤魔化すようにそれに話しかけた遊真は、恐る恐る靈魂に手を伸ばす。

そっと触れてみると、冷たい感触が指先に走ったが、どうにも靈魂の方は嫌がってはいないようなので、そのままゆっくりと撫でみる。

ひんやりとしたその体は、走って汗をかいた体には丁度良く、なんだか気持ちよかった。

「夏には便利かもな……」

扇風機の代わりにはなるかもしれない。

そんなことを考えていると、すぐそこから幾つかの足音が聞こえてくる。

「遅かったじゃないですか、遊真さん。やっぱり私に任せた方がよかったんじゃないですか？」

「お疲れ様です。大丈夫でしたか？」

いつもの紅白の衣装を身に纏った霊夢と、里で会った銀髪の刀少女。

そして――

「あらあら、わざわざ来てもらってありがとうね。ご苦労様」

幽雅な雰囲気を出す妙齡の女性。

桜色のふわふわとした髪から覗く瞳とふくらとした唇は、柔らかな笑みを形作っている。

「ここ、白玉楼の主。」

西行寺幽々子の姿がそこにあった。



はくぎよくろう
白玉楼。

冥界に存在する、広大なまでの規模を持つ立派な日本屋敷である。

「ごめんなさいね、家の妖夢が迷惑をかけちゃったみたいで」

ここに住んでいるのは、主人である西行寺幽々子と、大勢の人魂たち。

「重ね重ね、申し訳ありません……」

そして、庭師兼護衛役。

半人半霊の剣士、魂魄妖夢。こんぱくようむ

遊真を盗人と勘違いした少女の正体である。

半人半霊、などと言うと、何かよほど異質なものに感じられるが、彼女自体の体はごく普通で、常人となんら変わりもないらしい。

そんな彼女が半霊たる所以が、今は遊真の膝の上に収まっている霊魂——彼女の半身であるそうだ。

「ま、ちゃんと駄目になった食材分、ご馳走してくれるなら、私は文句ないけどね」

あっけらかんとした様子で、霊夢はそう言っただけ。

今回、妖夢が遊真たちへのお詫びとして持ち出したのは、自分たちの住居である白玉楼へお招きし、夕食をご馳走する、というものだった。

彼女を連れだって博麗神社に戻った遊真がその話をしてみると、霊夢は即座にそれを快諾。

それほどまでに彼女にとって白玉楼の夕飯は魅力的なものらしい。

鼻歌混じりの上機嫌な霊夢と共に、いざ出発、したまではよかったのだが。

「あの、遊真さん。そろそろ私の半霊を返してほしいのですが……」
「やー、ごめん。もうちょい待って。ちょっとこれは手放しがたくて……」

ひんやりとした靈魂を体に当て、アイシングもどきをしながら、遊真は大きく息を吐く。

冥界へ辿り着いた彼らを待ち受けていたのが、あの長い長い大階段だったのである。

空を飛べる霊夢と妖夢にとっては何も問題はないが、遙か空の彼方まで続いて見えるその階段に、遊真は冷や汗をかきっぱなしだった。

見かねた霊夢が遊真を抱えて飛ぼうかと提案したのだが、どうやら彼の男としての尊厳はそれを許さなかったらしい。

もっとも、そんなプライドは上り始めて早々に崩壊してしまったのだが。

「まったく、そういうことならば、言ってもらえれば私もお手伝いしましたのに……」

「……いや、なんで当たり前のようにお前が紛れ込んでるんだよ」

そう言って遊真は、隣でうんうんとわざとらしく唸っている少女、射命丸文に話を振る。

「あら、いいのよ？ ご飯はみんなで食べたほうがおいしいしね」

「と言う訳で、私も御呼ばれすることになったのですよ」

「ふうん……」

適当に相槌を返してから、遊真は向かいに座る幽々子に視線を向けた。

ゆったりとした衣服に身を包む彼女は、にこにこと人懐こそうな笑みを浮かべてはいるが、どこか浮世離れた空気を発していて、眺めていて不思議な気分になる。

呑気な表情からは想像もできないが、幻想郷の一角を占める冥界の主たる彼女は只者ではないはずである。

今回の招待も、彼女の人柄があつてこそのもので、悪い人物ではないと遊真は思っているのだが――

「とうかですね、遊真さん！」

と、一人物思いに耽っていた遊真だが、いきなりずっと顔を近づけてきた文にそれを遮られる。

「結局、あなたへの取材がずっと先送りになっていたので、そろそろお話を聞かせてほしいんですよ！」

「あー、そういうばそんな話だったような……」

そうである。

博麗神社での一件以降、うやむやにはなっていたのだが、元々文は遊真に取材しに来ていて、遊真自身もそれを承諾したのだった。

「さあさ、準備はよろしいですね？　ちなみに拒否権はありませんよ！」

生き生きしながら手帳とペンを取り出す文に、何やら嫌な予感を覚える遊真。

ちなみに霊夢は我関せずといった様子で静かに茶を啜っている。

「……あ、それでは私は用事がありますので……」

続いて遊真に縋るような目で見つめられた妖夢は、さっさとその場を立ち去ろうとする。

それに反応したのか、半霊も遊真の腕の中から抜け出し、彼女について行ってしまった。

「……手短に頼むよ」

インタビューの対象が最初から若干げんがりしていることなどお構いなしに、文の取材は開始した。

□ ■ □ ■ □ ■

その後、文の質問責めを何とか乗り切り。

未だに物足りなさそうな文の視線を避けるように、遊真は中庭に出て来ていた。

質問自体は遊真の想像していたよりも大分まともなものであった。しかし遊真の場合、外の世界での事を質問される度、ひたすら記憶を掘り返す必要があるので、何でもない質問にひどく頭を使わなければならない。

何世代も前のパソコンの如き処理速度である。

「……不便だよなあ、どうにも」

自分の頭を軽く小突きながら、見事な日本式の庭園を一人ぶらぶらと歩きまわる。

冥界などという仰々しい名前とは裏腹に空気は綺麗に澄んでいて、酷使した脳にはそれが心地よかった。

「……？」

庭に植えられた木々に遊真が目走らせていると、一本の木にその視線が止まった。

白玉楼の庭園には大量の桜の木が植えられている。

今の季節は開花にはまだ早い、一つ一つの木にはしっかりとした蕾が見え隠れしており、後の見事な桜吹雪を予期させている。

整然と立ち並ぶその姿はこの時点でも充分に美しく、ここで花見でもすればそれはそれは華やかなものになることは間違いないだろう。

その桜並木の中に、一際目立つ桜の木があった。

自らを誇示するように枝を広げるその姿は、周りの桜と比べて一回りも二回りも大きい。

だが、何よりも異様なのはその妖気だった。

この幻想郷にやってきて、遊真はおぼろげながら、魔力や妖力といった不可思議な力の存在を感知することが出来るようになった。しかし、目の前の大樹が放っているその気配は、今まで遊真が感じたことがなく、その上異常なほど強大なものである。

見ているだけで圧倒され、段々と意識がぼやけてくるような膨大で、夢中で、そして何よりも、危うい。

体のどこかが危険信号を発しているのに、遊真の眼差しは縫い付けられたかのように動かなかった。

――

「遊真さん？」

「――ん、あれ？」

突然肩に何かに触れる感触に、遊真の意識が引き戻された。振り向くと、心配そうな顔をした妖夢がそこに立っている。

「……俺、今何してた？」

「いえ、何か上の空のようでしたが――あ」

きよとん、とした様子の遊真に妖夢も首を傾げていたが、遊真の視線の先を見て、納得したような顔になる。

「あれは、西行妖さいぎょうあやかしですね」

「西行妖……」

妖夢の口から出た名前を、そのまま反復する。

西行妖。

それこそがあの凄まじい妖気の源である桜の名前らしい。

「あれってやっぱり、何か曰く付きのシロモノなのか？」

「曰く付き、ですか。そうですね……」

「あー、やっぱ話し辛いことか」

遊真の問いかけに、妖夢は困ったような表情をする。

「話し辛い、というか、えーっと……」

彼女はしばらく言葉を選ぶように考え込むと、恐る恐る語りだす。

「あの桜は、ですね。その昔、あまりの美しさに、多くの人間が死に場所を選んだ場所なんです」

「死に場所に、って……」

それはつまり、人間の怨念とか良からぬモノが集まっているのではないだろうか。

思わず顔を青くする遊真に、苦笑しながら妖夢は続ける。

「人の精気を吸って成長した西行妖は、直に妖力を持ってしまったのですが、そのことを危険視された結果封印されてしまい、今は開花することも無いんですよ」

だから今は害は無いんです、との妖夢の言葉に、安心したように遊真は大きく息を吐いた。

「敏感な人は、桜の妖気にあてられてしまうこともあるみたいですね」

「なるほどね。それで、か……」

そう考えると、少し皮肉な事なのかもしれない。

人を魅了するほど美しかったが故に、咲くことすら叶わなくなっ

てしまった桜。

その云われからは恐ろしい物のように思えるが、この桜も悲しい歴史を背負っているのだろうか。

どこか感傷的な気分になっていた時だった。

「御機嫌よう。それと、初めまして、かしらね」

「——っ!？」

突如背中から声かけられた。

不自然な違和感に、飛び退くようにしながら振り返る。

「あら、ごめんなさい。驚かせちゃったかしら？」

誰も居なかったはずのそこに、音もなく一人の女性が現れていた。フリルの付いたドレスに、金色のロングヘアーが棚引いている。

西洋の麗人のような姿ではあるが、その妖しい笑みを見た遊真は、何故だか悪寒が止まらなかった。

「八雲紫、やくもむかりですわ。以後お見知りおきを。そして——」

——ようこそ、幻想郷へ。

#8 凜として咲く桜の如く？（後書き）

時間がかかった割には随分盛り上がりがない話だったり
次回はそうでもない……かも？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9675q/>

東方探真記

2011年10月8日18時40分発行